宮城県文化財調査報告書第250集

大久保貝塚ほか

平成31年3月

宮城県教育委員会

大久保貝塚ほか

序　文

平成２３年３月１１日に発生した東日本大震災から早８年が経過しました。生活基盤の整備や道路・鉄道などの復興は着実に進められ，県内陸部では震災の影響はほとんど感じられなくなりましたが，被害が甚大であった沿岸部においては，復興計画仕上げとしての復興発展期における更なる整備の促進が急務であると認識しております。

震災以降，当教育委員会では復興道路や常磐線復旧，高台移転事業等の復興事業に伴う発掘調査を実施してまいりました。平成２４年度以降は，全国から自治法派遣による埋蔵文化財専門職員の応援を得て調査体制を強化するなど，復興調査に迅速に対応してまいりましたが，ようやく収束を迎えつつあります。今後も引き続き，関係機関と連携を図り，復興調査の早期終了と復興事業の円滑な推進に向けて努力していきたいと考えております。

本書は，遺跡との関わりが生じた開発事業において，関係機関などと十分な協議・調整を重ねたうえで調査することとなったもののうち，平成25・26年度に当教育委員会が国庫補助金を得て，開発工事に先立って確認調査を実施した遺跡の成果を収録したものです。こうした成果が広く県民の皆様や各地の研究者に活用され，地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後になりましたが，遺跡の保存に理解を示され，発掘調査に際しては多大なるご協力をいただいた関係機関の方々，地元住民の皆様に対し，厚く御礼申し上げる次第です。

平成３１年３月

宮城県教育委員会

教育長　高橋　仁

例　言

1．本書は，宮城県が国庫補助金を得て，宮城県教育庁文化財保護課（現，文化財課）が平成 25・26 年度に担当した，公共事業に係る発掘調査報告書である。
2．各遺跡の発掘調査から報告書作成に至る一連の作業については，調査原因となった開発行為に係る機関の依頼を受けて文化財保護課（現，文化財課）が行ったものである。
3．各遺跡の保存協議や発掘調査にあたっては，開発関係部局や地元教育委員会から多大の協力をいただいた。
4．各遺跡の位置図は，国土交通省国土地理院発行の 1/25,000 の地形図を複製して使用した。
5．各遺跡の測量座標値は，世界測地系に基づく平面直角座標第Ⅹ系による。
6．土色の記述にあたっては，『新版　標準土色帖　1996 年版』（小山・竹原：1996）を用いている。
7．本書は調査を担当した各調査員の協議を経て下記のものが執筆・編集した。
　平成 25・26 年度調査の概要　佐藤憲幸
　大久保貝塚・大向遺跡　西村力　　貞山堀　初鹿野博之
8．発掘調査の記録や出土遺物については，宮城県教育委員会が保管している。

目　次

平成 25・26 年度調査の概要
大久保貝塚…… 1
貞山堀…… 71
大向遺跡…… 75
報告書抄録

平成 25・26 年度調査の概要

埋蔵文化財緊急調査費の国庫補助金を受けて，道路建設・ほ場整備事業・住宅建築等の開発事業に伴う分布調査，試掘・確認調査等を実施した。これらのうち，平成 25 年度の貞山堀，平成 26 年度の大久保貝塚の調査成果について本書に収録した。以下，各遺跡の概要を述べる。なお，川崎町が主体となって実施した大向遺跡も掲載している。

大久保貝塚は南三陸町，志津川湾の湾奥部に位置する縄文時代晩期の貝塚である。国道 45 号線の復旧に伴う仮設道路建設に伴い確認調査を実施した。貝層・遺物包含層の分布を確認し，一部を掘り下げたところ，厚さ 60cm の貝層を含み，厚さ 1.2m にわたり良好な堆積状況を保っていることが判明した。多くの多様な遺物や食料残滓が出土し，当時の生活の一端が明らかとなった。調査例の少ない当地域における貴重な成果である。

貞山堀は近世～近代初期に作られた運河である。多賀城市大代における東日本大震災で被災した護岸の復旧作業に伴い確認調査を実施した。調査の結果，護岸は近代以降に改修されたものと判断された。

大向遺跡は川崎町の河岸段丘上に立地する縄文時代中期～弥生時代遺跡である。防火水槽設置に伴い確認調査を実施した。調査の結果，縄文時代中期中葉の土器埋設遺構が検出された。

なお，東日本大震災発生後の平成 23 年度以降は，重要遺跡範囲確認調査の実施を休止し，復旧・復興事業に対応することとした。また，平成 24 年度からは復興交付金が創設され，復興交付金事業や被災住宅再建等への対応は復興交付金を活用し，それ以外の開発事業に埋蔵文化財緊急調査費の国庫補助金で対応した。

大久保貝塚（おおくぼ）

調 査 要 項

遺 跡 名：**大久保貝塚**（宮城県遺跡地名表登載番号No. 60001）遺跡略号：YR
所 在 地：本吉郡南三陸町志津川字大久保
調査原因：国道45号迂回路建設工事に伴う確認調査（復興事業）
調査主体：宮城県教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課（現，文化財課）
調 査 員：村田晃一・傳田惠隆
調査期間：平成26年６月16日～25日
対象面積：3040.6㎡
調査面積：396.6㎡
調査協力：南三陸町教育委員会生涯学習課・国交省

第1章　はじめに

1. 調査に至る経緯

東日本大震災で被災した国道 45 号線の復旧に伴う仮設道路建設が遺跡範囲内を南北に縦断して計画されたことから，平成 26 年 6 月 16 日～ 25 日に確認調査を行った。その結果，対象地北側の北斜面裾部で貝層・遺物包含層が分布することが確認された。貝層は残存状況が良好で，食物残滓などの直接的廃棄により形成されたものであり，多量の遺物を含むことが確認されたことから，6 月 24 日と 7 月 15 日に国交省・町教委と保存協議を行い，仮設道路の路面高を高くする計画に変更し，盛土により保存することとなった。以下，今回の確認調査によって検出された遺構と出土遺物について報告する。

2. 遺跡の概要

大久保貝塚は南三陸町津川字大久保に所在し，志津川湾の湾奥部，八幡川河口南岸に位置する縄文時代晩期の貝塚である（第 1 図）。南三陸町の大部分は山地・丘陵地で，低地は少なく，海岸線はリアス式海岸を形成する。遺跡は西から東へと伸びる丘陵の東端部，河口～海に面した丘陵上～裾部に立地し，沖積地に形成された中心市街地を北東に望む。

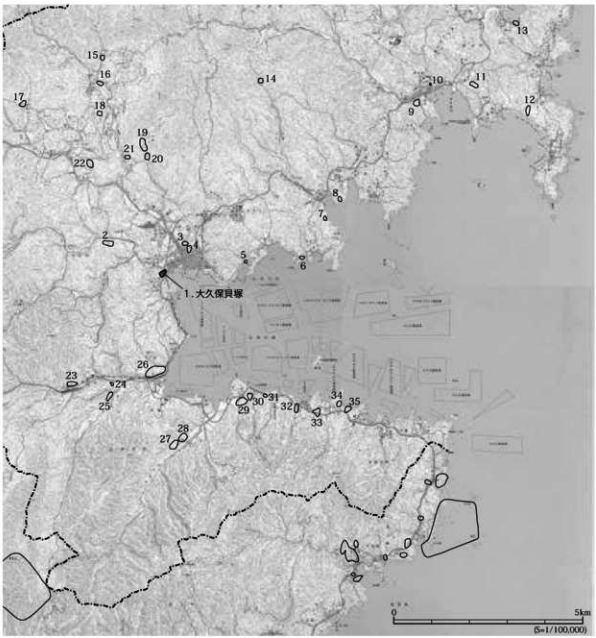
周辺の遺跡を概観すると，町内ではこれまでに 97 の遺跡が見つかっており，縄文時代と中世城館が大半を占める。縄文時代の遺跡は 35 あり，沿岸や河川沿いに分布する。早期～晩期の各時期の遺物が採集されているが，詳細がわかる遺跡は少ない。大久保貝塚周辺では遺跡は少なく，他に貝塚は確認されていない。一方，湾口部にあたる町北東部では沿岸の 4 ヶ所で貝塚が確認されている。中期～晩期に形成され，アサリを主体貝とするものが多い。町史跡の田茂川貝塚では石鏃の刺さった鯨骨が出土している（東北歴史資料館 1989）。

第2章　調査成果

1. 調査の方法と経緯

調査対象地は丘陵末端の台地頂部平坦面とその北斜面である（第 2 図）。頂部には，東西トレンチ（T1）と南北トレンチ（T2）を設定した。ともに表土直下が地山となっており遺構・遺物は検出されなかった。丘陵頂部は居住域が想定されたが，畑の造成により削平されたと考えられる。

北斜面には，東西 14m，南北 16m の調査区 T3 を設定した。傾斜変換点を中心に貝層・遺物包含層が検出されたことから，一部西側への広がりも確認した。貝層・遺物包含層はトレンチ内の東西 14m，南北 11m に分布する。規模・堆積状況を確認するため調査区東辺において幅 1 ないし 2m の深掘区を設け掘り下げを行った。掘り下げは大別層単位で人力で行い，遺物や動物遺存体を採取した。遺物量は平箱 29 箱である。



No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	大久保貝塚	丘陵斜面	貝塚	縄文晩	19	大沢遺跡	丘陵	散布地	縄文
2	大船遺跡	丘陵麓	散布地	縄文	20	双田遺跡	丘陵麓	散布地	縄文
3	城場遺跡	丘陵麓	散布地	縄文	21	秋口川遺跡	沖積平野	散布地	縄文
4	上の山遺跡	丘陵	散布地	縄文	22	秋の沢遺跡	丘陵	散布地	縄文
5	池沢遺跡	丘陵麓	散布地	縄文	23	荒町遺跡	丘陵麓	散布地	縄文
6	荒砥遺跡	沖積平野	散布地	縄文	24	大畑遺跡	丘陵麓	散布地	縄文
7	清水浜遺跡	丘陵麓	散布地	縄文	25	鷹代の口遺跡	丘陵麓	散布地	縄文
8	細浦遺跡	丘陵麓	散布地	縄文	26	大平遺跡	丘陵	城館散布地	縄文早・中世
9	雷木遺跡（町向貝塚）	丘陵	貝塚	縄文前～後	27	石堂遺跡	丘陵麓	散布地板碑群	縄文・中世
10	管の浜貝塚	丘陵麓	貝塚	縄文中～晩	28	上沢前遺跡	丘陵麓	散布地	縄文
11	長者屋敷貝塚	丘陵斜面	貝塚	縄文中～晩	29	長者屋敷遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文
12	大沼遺跡	丘陵	散布地	縄文前・中	30	波伝谷遺跡	丘陵	散布地	縄文前
13	田尾川貝塚	丘陵	貝塚	縄文後・晩	31	波伝谷東遺跡	丘陵	散布地	縄文前
14	宋辺遺跡	段丘	散布地	縄文	32	津の宮遺跡	丘陵	散布地	縄文中
15	残谷遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文	33	若宮遺跡	丘陵	散布地	縄文中
16	林際遺跡	丘陵	散布地	縄文	34	近東遺跡	丘陵麓	散布地	縄文
17	路畑遺跡	丘陵麓	散布地	縄文	35	平小浜遺跡	丘陵	散布地	縄文
18	統石遺跡	丘陵	散布地	縄文・中世					

第１図　遺跡の位置と周辺の縄文時代遺跡

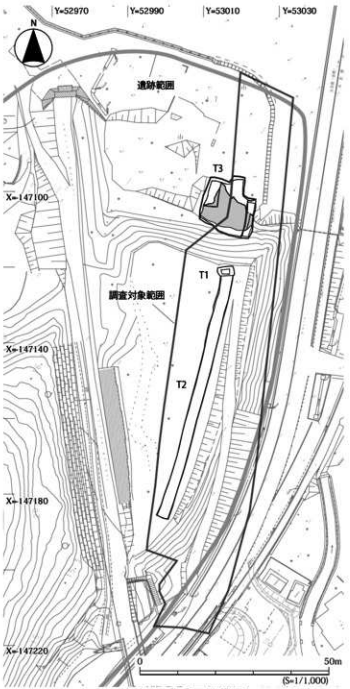
2. 層序

丘陵頂部は，20cm 前後の表土の直下は地山である。北斜面は上層から順に，表土，貝層・遺物包含層，地山で，貝層・遺物包含層の厚さは最も厚いところで 1.2m である。

3. 発見した遺構と遺物

1. 貝層・遺物包含層

貝層・遺物包含層は T3 のほぼ全域に分布する（第 3 図）。東側で深く西側では浅くなっており，おもに北東側調査区外に延びる。北東部は地山以下まで撹乱が及ぶ。深掘区では堆積層は北に向かって傾斜し，5 層に大別される。1 層は黄褐色土層で厚さ 7cm，2 層は黒褐色土層で地山ブロックを多く含み厚さは 20cm である。3 層は黒褐色の混土貝層で厚さ 60cm，混貝率から 5 層 (a ～ e) に細分される。4 層は暗褐色～黒褐色土層で地山ブロックや地山小礫を含み厚さは 70cm，自然堆積した間層とみられる。5 層は黒色土層で厚さ 15cm，6 層は混土貝層で厚さ 10cm，7 層は炭化物層でで厚さ 3cm である。8 層は黒褐色土層で包含層形成時の表土と考えられる。2 ～ 4 層は複数の細別層から構成されるが，細別層単位での掘り下げは行わず，遺物は大別層単位で取り上げた。

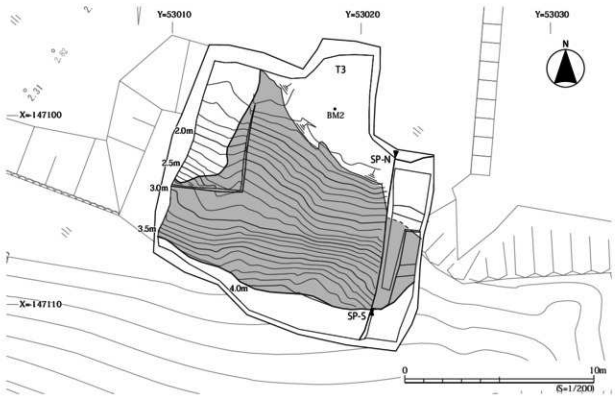


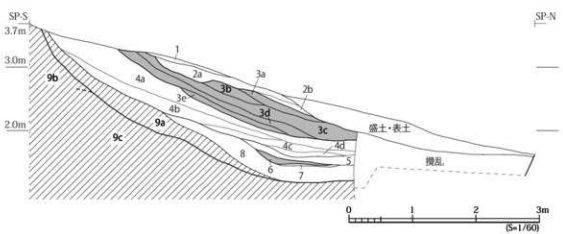
第 2 図　調査区配置図

2･3･6 層は土壌を全て土嚢袋に入れサンプル番号を付け持ち帰った。土壌サンプル数は 190 袋で，4mm・2mm・1mm 目の水洗篩により試料を分離した。

2. 出土遺物

T3 の貝層・遺物包含層からは，縄文土器・土製品・石器・石製品・骨角器・動物遺存体が出土した。計数・観察対象として，縄文土器については特徴をよく示すものを抽出した。その他の人工遺物につ





層	土色	土性	特徴・混入物等	性格
1	黄褐色（10YR5/6）	シルト		包含層
2a	黒褐色（10YR2/2）	シルト	地山（9b 層）の小ブロックを多く含む．炭化物を含む．	
2b	黒褐色（10YR2/2）	シルト	炭化物を多く含む．	
3a	黒褐色（10YR2/3）	シルト	貝殻を多量に含む（盛土貝層，貝殻の割合高い）．	貝層
3b	黒褐色（10YR2/2）	シルト	貝殻を含む，炭化物を含む（盛土貝層，土の割合高い）．	
3c	黒褐色（10YR2/3）	シルト	貝殻を多く含む，炭化物を含む（盛土貝層，貝殻の割合高い）．	
3d	黒褐色（10YR2/2）	シルト	貝殻を含む，炭化物を多く含む（盛土貝層，土の割合高い）．	
3e	暗褐色（10YR3/3）	シルト	貝殻を含む（盛土貝層，土主体で貝殻少ない）．	
4a	暗褐色（10YR3/3）	シルト	地山（9b 層）の小ブロックを多く含む．炭化物を含む．	包含層
4b	黒褐色（10YR2/3）	砂質シルト	地山（9a・9c 層）の小礫を多量に含む（間層）．	
4c	黒褐色（10YR2/3）	シルト		
4d	暗褐色（10YR3/4）	シルト		
5	黒色（10YR2/1）	粘土質シルト		
6	黒褐色（10YR2/2）	シルト	貝殻（カキ）を多く含む（盛土貝層）．	貝層
7		炭化物層		炭層
8	黒褐色（10YR2/3）	砂質シルト	地山（9a・9c 層）の小礫を多量に含む（貝層形成時の旧表土？）．	旧表土
9a	黒褐色（10YR3/1）	小礫層	岩盤崩壊土．	地山
9b	褐色（10YR4/4）	シルト	地山小礫を含む．	
9c	褐色（10YR4/4）	小礫層	岩盤崩壊土．	

第 3 図　T3 平面・断面図

第 1 表　各種遺物の層位別出土量

	表採	検出	堆積土	1・2 層	1 層	2 層	3 層	4 層	5 層	計
縄文土器		28 (12)	11 (4)		1	15 (4)	131 (84)	4 (4)		190 (108)
土製品		1 (1)	1 (1)				8 (8)			10 (10)
剥片石器		4	1			23 (3)	61 (17)			90 (20)
礫石器	5	9 (1)		2 (2)		17 (3)	103 (20)	4 (1)	2	142 (27)
石製品		6 (3)	1			3	9 (5)			19 (8)
骨角器		5			1	6 (1)	90 (37)	1		103 (38)
計	5	53 (17)	14 (5)	2 (2)	2	64 (11)	402 (171)	9 (5)	2	554 (211)

土器は抽出点数，他は全出土点数．括弧は図化掲載点数．

いては現場取採取資料およびすべての 4mm 篩資料から，全点を抽出した。

第 1 表に，抽出した各種遺物の層位別出土量を示した。帰属層が明らかなものについて見ると 3 層が大半を占める。3 層同様土壌サンプルを採取している直上の 2 層がやや多いが，これら以外は遺物はごく僅かで，1・4・5 層からは土器片などがビニール袋 1 袋ずつ出土したのみである。6 層は混土貝層，7 層は炭化物層で人為的成因によるものであるが，トレンチ内に現れたごく一部の調査であったためか，6 層から土器片 1 点と土壌サンプルから石器剥片が 1 点出土したのみであった。

遺物のほとんどは 3 層から出土し，他の層ではまとまった出土状況にないことから，ここでは遺物を分類ごとに記載し，各層からの出土状況は表に示す。

(1) 縄文土器

抽出したのは口縁部資料・底部資料・復元資料で計 190 点である。大きく器種・器形で分類し，口縁部形態・装飾・施文方法により細分した。これらのうち出土土器全体の様相を示すのに必要となる 108 点を選択し図示した。掲載しなかったものは集計表に含め点数を示した。

深鉢

鉢形の器形で器高 / 口径が 1 以上のものを深鉢とした。各類ごとに小型～大型のものがある。

深鉢 A 類（第 4 図）

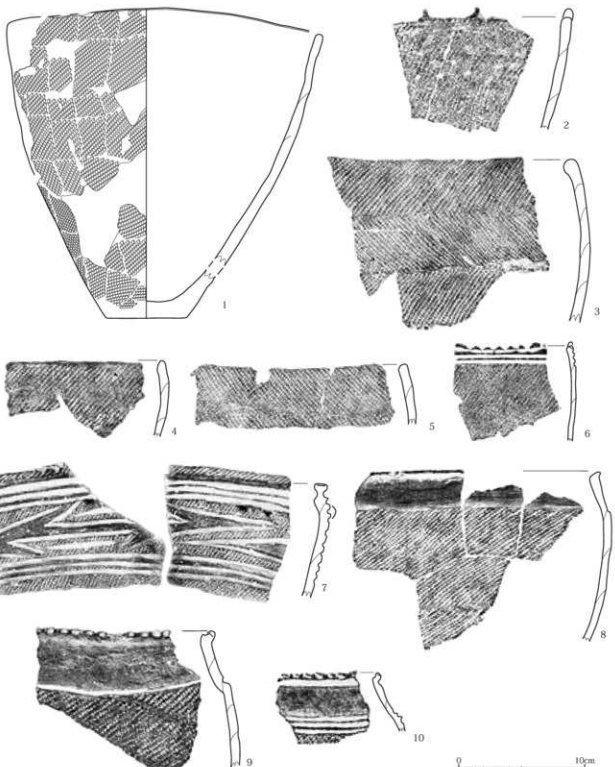
口縁が直立ないし内湾し，体部に縄文が施文されるもの。A1 類は平坦口縁で口縁以下に縄文が施文されるもので，2 は口縁に突起をもつ。縄文には単節の斜行・羽状 (3)・付加条 (2) がある。 A2 類は口縁に羊歯状文が配されるものである (6)。

深鉢 B 類（第 4 図）

口頸部が内傾し，口唇部がごく短く外反ないし屈曲して短く外反，体部に縄文が施文されるもの。B1 類は平坦口縁で体上部に π 字文などの磨消縄文が配される (7)。B2 類 (8 ～ 10) は肩部より上の内傾する口頸部が無文帯となり口縁端部がごく短く外反するもので，口縁端部に刻みを持つものや肩部に平行沈線が巡るもの (9・10) がある。

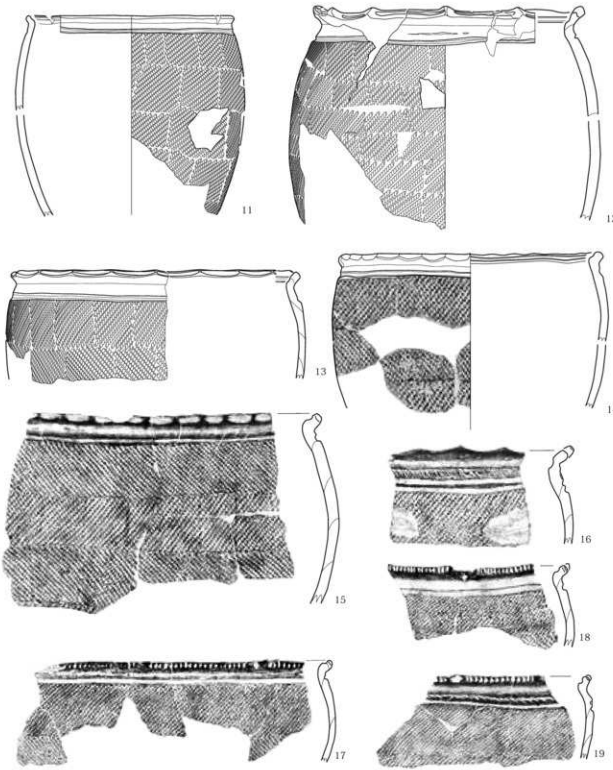
深鉢 C 類（第 5 ～ 6 図）

口頸部が内傾し，口縁部が屈曲して短く外反するもの。C1 類は沈線によって体部と画された狭い口頸部が無文帯となるか刻み目帯や沈線が施されるもので，平坦口縁のもの (11)，波状縁もの (12)，連続楕円形彫去による小波状縁のもの (13 ～ 16)，平坦口縁で口縁端部に刻みが施されるもの (17 ～ 21) がある。C2 類は口縁に山形突起を持つもので，山形突起の両脇に小突起を伴うものや，口唇に



No.	器種	分類	層	特徴	写真図版	登録No.
1	深鉢	A1	3 層	平縁．縄文LR．	3－1	157
2	深鉢	A1	4 層	平縁＋突起．付加縄文LR＋RL？	3－2	258
3	深鉢	A1	3 層	平縁．羽状縄文LR＋RL．	3－3	183
4	深鉢	A1	3 層	平縁．縄文LR．	3－4	181
5	深鉢	A1	3 層	平縁．縄文LR．	3－5	179
6	深鉢	A2	4 層	平縁．2 個一対の小突起＋突起間連結右下がり横走弧線＋4 個の刺み目．平行沈線文．縄文LR．	3－6	169
7	深鉢	B1	検出	平縁→ヘラ刻み（斜位）→内面に隆帯．平行沈線文．2 個一対の貼瘤．n 字文＋Z 字状文（磨消縄文）．平行沈線文．縄文LR．	3－7	284
8	深鉢	B2	4 層	平縁．頸部ミガキ．縄文LR．	3－8	171
9	深鉢	B2	3 層	平縁→連続指頭押圧．頸部ミガキ．縄文LR．	3－9	172
10	深鉢	B2	4 層	平縁→ヘラ刻み→沈線．沈線文．平行沈線文．縄文LR．	3－10	170

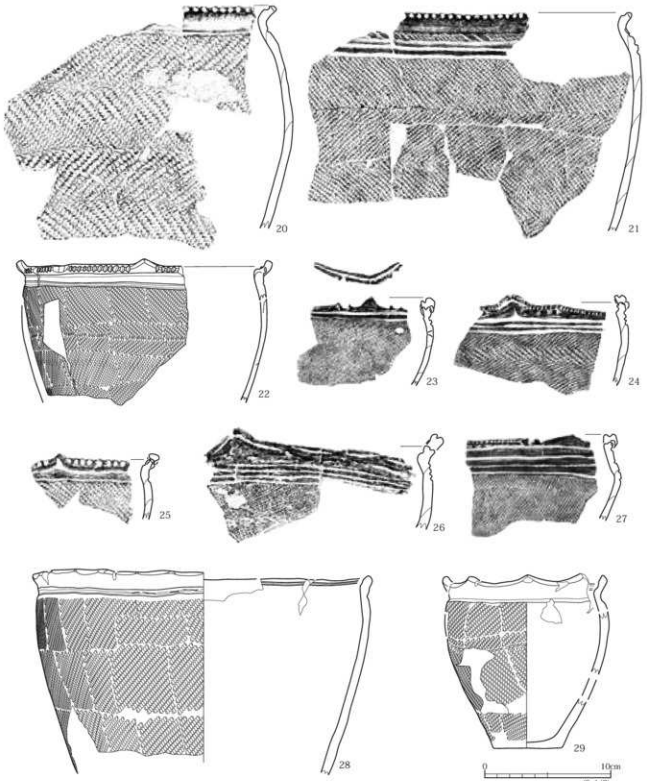
第 4 図　深鉢 (1)



S=1/3

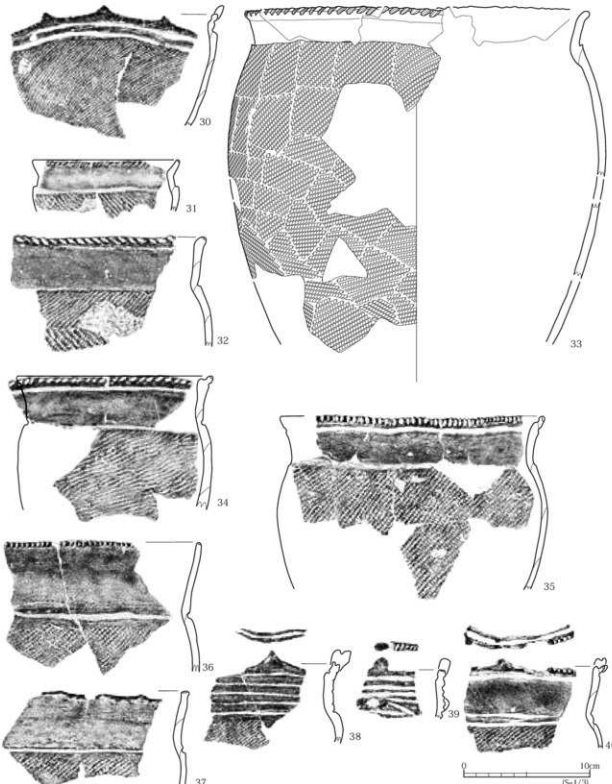
No.	部時	分類	層	特徴	写真図版	登録 No.
11	深鉢	C1	3 層	平縁＋沈線、沈線文、縄文 LR.	3－11	159
12	深鉢	C1	3 層	平縁＋山形突起＋口押に沈線＋沈線、沈線文、縄文 LR.	3－12	158
13	深鉢	C1	3 層	小波状縁＋沈線、沈線文、体部縄文 LR.	3－13	115
14	深鉢	C1	3 層	小波状縁＋沈線、沈線文、縄文 LR.	3－14	154
15	深鉢	C1	3 層	小波状縁（楕円形抜け）＋沈線、沈線文、体部羽状縄文 RL・LR.	3－15	243
16	深鉢	C1	3 層	小波状縁＋沈線、櫛歯状刻目、平行沈線文、体部縄文 LR.	3－16	195
17	深鉢	C1	3 層	平縁＋ヘラ刻み＋２個一対の突起＋沈線、沈線文、縄文 LR.	3－17	138
18	深鉢	C1	3 層	平縁＋ヘラ刻み＋２個一対の突起＋沈線、沈線文、体部縄文 LR.	3－18	214
19	深鉢	C1	3 層	平縁＋ヘラ刻み＋２個一対の突起＋沈線、平行沈線文＋斜位列点充填、縄文 LR.	3－19	186

第 5 図　深鉢 (2)



No.	器種	分類	層	特徴	写真図版	登録 No.
20	深鉢	C1	3 層	平縁＋ヘラ刻み＋沈線．沈線文．体部羽状縄文 LR ＋ RL．	4－1	245
21	深鉢	C1	3 層	平縁＋ヘラ刻み＋沈線．櫛描状切目．平行沈線文．羽状縄文 LR ＋ RL．	4－2	127
22	深鉢	C2	3 層	平縁＋ヘラ刻み＋山形突起 4 単位＋沈線．沈線文．体部羽状縄文 RL ＋ LR．	4－3	240
23	深鉢	C2	3 層	平縁＋山形突起＋ 2 個一対の突起＋口唇に沈線＋沈線．平行沈線文．縄文 LR（細かい）．補修孔．	4－4	188
24	深鉢	C2	3 層	平縁＋ヘラ刻み＋山形突起＋ 2 個一対の肥厚＋沈線．平行沈線文．体部羽状縄文 RL ＋ LR．	4－5	211
25	深鉢	C2	3 層	平縁＋ヘラ刻み＋沈線．沈線文．縄文 RL．	4－6	193
26	深鉢	C2	3 層	平縁＋山形突起＋沈線．平行沈線文 4 段．体部縄文 LR．	4－7	209
27	深鉢	C2	3 層	平縁＋ヘラ刻み＋山形突起＋ 2 個一対の突起＋口唇に沈線．平行沈線文 4 段＋刺突充填．体部縄文 LR（細かい）．	4－8	200
28	深鉢	D	3 層	小波状縁＋沈線．沈線文．縄文 LR．	4－9	135
29	深鉢	D	3 層	大波状縁＋沈線．体部との境に段．羽状縄文 LR ＋ RL．	4－10	164

第 6 図　深鉢 (3)



No.	器種	分類	層	特徴	写真図版	登録 No.
30	深鉢	D	3 層	大波状縁・沈線、平行沈線文、縄文 LR.	4－11	113
31	深鉢	E1	2 層	平縁・ヘラ刻み、頸部内傾して緩やかに外反、頸部ミガキ、体部縄文 RL.	4－12	260
32	深鉢	E1	3 層	平縁・ヘラ刻み、頸部やや外傾、頸部ミガキ、体部との境に段、体部羽状縄文 LR・RL.	4－13	202
33	深鉢	E1	3 層	平縁・ヘラ刻み/頸部に段、縄文 LR	4－14	151
34	深鉢	E1	3 層	平縁・ヘラ刻み・沈線、体部との境に沈線による段、口縁下に沈線巡る、頸部ミガキ、体部縄文 LR.	4－15	185
35	深鉢	E1	3 層	平縁・ヘラ刻み・沈線、頸部ミガキ、体部縄文 LR.	4－16	139
36	深鉢	E1	検出	平縁・ヘラ刻み、頸部ミガキ、沈線文、体部縄文 LR（太端の結節アタリあり）.	4－17	273
37	深鉢	E1	検出	小波状縁、沈線文、体部縄文 LR.	4－18	275
38	深鉢	E2	3 層	平縁？・山形突起・沈線、頸部に 2 体に平行沈線文 5 段、体部縄文 LR.	4－19	191
39	深鉢	E2	検出	平縁・ヘラ刻み・2 個一対の突起、平行沈線文、沈線文、2 個一対の突起.	4－20	281
40	深鉢	E2	検出	平縁・ヘラ刻み・山形突起・沈線、沈線文、平行沈線文、体部縄文 LR.	4－21	294

第 7 図　深鉢 (4)

刻みや沈線，口頸部に突起形状に合わせた沈線文や平行沈線が施されるものがみられ，C1 類より装飾的である (22 ～ 27)。

深鉢 D 類（第 6 ～ 7 図）

胴上部がやや内傾，口頸部が S 字状に緩やかに外反し，波状ないし小波状口縁のもので，口頸部は無文ないし沈線が巡り，口縁内面には沈線が巡る。体部に縄文が施文されるもの。ごく小型のものと大型のものがある (28 ～ 30)。

深鉢 E 類（第 7 図）

胴上部がやや内傾し，口頸部が S 字状に緩やかに外反，口頸部の幅が比較的広いもの。E1 類は平坦口縁で口縁端部ないし口唇部に刻みをもち，口頸部が無文帯となるもの (31 ～ 37) で，頸部下端に沈線が巡るものがある。口縁部装飾は刻みのみのものが大半であるが，34・35 は口縁端部直下と内面に沈線が巡る。E2 類は口縁に突起をもつものである。口唇や口縁端部に沈線や刻みが，口頸部に平行沈線が施され，E1 類より装飾的である。

鉢

鉢形の器形で器高 / 口径が 1 以下のものを鉢とした。深鉢よりも装飾的なものが多い。

鉢 A 類（第 8 図）

口縁が内湾する器形で平坦口縁のもの。口唇部には刻みが施され，胴上部に横 C 字状文 (1) やメガネ状楕円文 (2) が配される。

鉢 B 類（第 8 図）

口頸部が内傾し，口縁端部が屈折してごく短く外反する器形のもの。いずれも平坦口縁で口縁端部には刻みが施される。B1 類は胴部中央の平行沈線により画された上半部に文様帯をもち，下半は縄文のみとなるものである。B1a 類は磨消縄文による曲線的雲形文が配されるもので (3・4)，口縁部には 2 個一対の突起が配され，肩部に突起をもつものもある (3)。B1b・c 類は磨消縄文による単純化された雲形文 (b) や入組工字文 (c) が配される (5 ～ 10) もので，いずれも肩部に突起が配される。口縁の一箇所に大型の突起をもつものもある (9・10)。B2 類は口頸部に平行沈線が施され，胴部は縄文のみとなるもので (11・12)，12 は肩部に 2 個一対の突起をもつ。

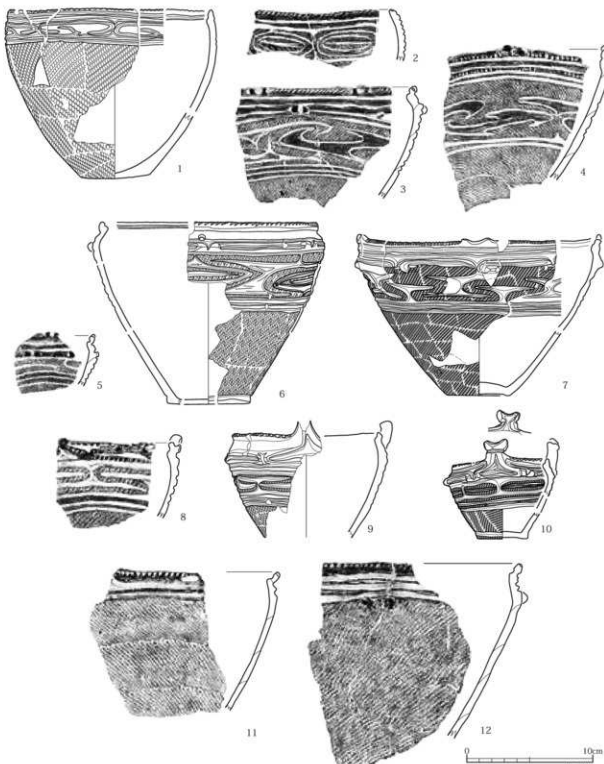
鉢 C 類（第 9 図）

肩部が角張り，頸部が内傾，口縁部が屈折して外反する器形のもの。口縁が波状のものが多く，それらには波底部の口唇に沈線が入る。C1 類は頸部に π 字文が配されるもので，13 は胴部上半に雲形文が配され，14 ～ 16 は π 字文間に刺突が充填される。16 は台付である。C2 類は頸部に刻み目帯，肩部に平行沈線と等間隔の刻みが施されるもので，19 は平坦口縁で端部に刻みが施される。シャープで均整の取れた作りである。20 はこれらに近似し，浅鉢寄りのプロポーションとなるものである。

鉢 D 類（第 10 図）

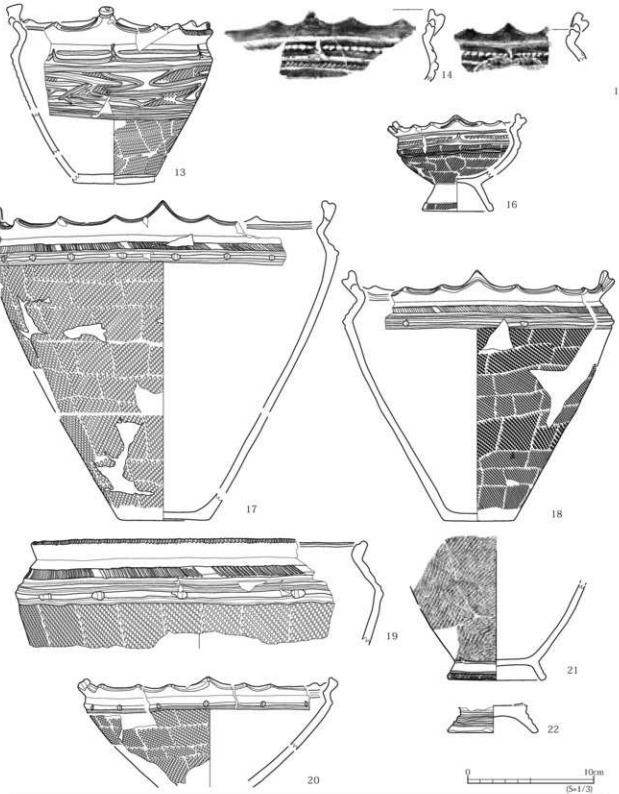
胴部上半～口縁部が S 字状に外反するもの。平坦口縁で端部に刻みが施され 2 個一対の突起をもつものや，波状縁のものがあり，頸部には沈線や平行沈線が施される。

鉢類には台付のものが認められ，台部には平行沈線が施されるもの (22) や末端に縄文が施される



No.	器種	分類	層	特徴	写真図版	登録 No.
1	鉢	A	3 層	ヘラ弱み＋沈線．沈線文．n 字文．横 C 字状文．平行沈線文．羽状縄文 LR＋RL．	5－1	163
2	鉢	A	3 層	平縁＋ヘラ弱み．平行沈線文．メガネ状楕円文（磨消縄文）．平行沈線文．縄文 RL．	5－2	225
3	鉢	B1a	3 層	平縁＋ヘラ弱み＋２個一対の突起＋沈線．平行沈線文．２個一対の貼瘤．雲形文（磨消縄文）．平行沈線文．縄文 LR	5－3	217
4	鉢	B1a	3 層	平縁＋ヘラ弱み＋２個一対の突起＋沈線．平行沈線文＋沈線間にヘラ弱み．雲形文（磨消縄文）．平行沈線文．縄文 RL．	5－4	215
5	鉢	B1b	3 層	平縁＋ヘラ弱み＋２個一対の突起＋沈線．沈線文．２個一対の貼瘤（n 字文？）．雲形文（磨消縄文）．平行沈線文．縄文 LR（細かい）．	5－5	122
6	鉢	B1b	3 層	平縁＋ヘラ弱み＋沈線．平行沈線文．２個一対の貼瘤 6 単位．雲形文 or 工字文（磨消縄文）．平行沈線文．縄文 LL．	5－6	111
7	鉢	B1b	3 層	平縁＋ヘラ弱み＋２個一対の突起＋沈線．平行沈線文＋ n 字文２個一対の貼瘤．雲形文 or 入組工字文（磨消縄文）．平行沈線文．縄文 LR．	5－7	110
8	鉢	B1c	3 層	平縁＋山形突起？＋ヘラ弱み＋沈線．入組工字文（磨消縄文）．平行沈線文．縄文 LR．	5－8	216
9	鉢	B1c	堆積土	平縁＋ヘラ弱み＋突起＋沈線．メガネ状浮文＋２個一対の貼瘤（5 単位）．平行沈線文．入組工字文（磨消縄文）．平行沈線文．縄文 LR．	5－9	134
10	鉢	B1c	3 層	平縁＋ヘラ弱み＋突起 1 単位＋沈線．メガネ状浮文＋２個一対の貼瘤（5 単位）．工字文（メガネ状，磨消縄文）．平行沈線文．縄文 LR．	5－10	121
11	鉢	B2	検出	平縁＋ヘラ弱み＋山形突起＋沈線．平行沈線文．体部縄文 RL（太端強調）．	5－11	276
12	鉢	B2	3 層	平縁＋ヘラ弱み＋沈線．平行沈線文．２個一対の貼瘤．体部縄文 LR．	5－12	207

第 8 図　鉢 (1)



No.	器種	分類	層	特徴	写真図版	登録 No.
13	鉢	C1	3 層	平縁＋2 個一対の突起 5 単位＋山形突起＋ヘラ刻み＋沈線．α 字文，雲形文（磨消縄文），平行沈線文，縄文 LR．	5－13	161
14	鉢	C1	3 層	小波状縁＋山形突起＋沈線．平行沈線文＋刺突充填＋α 字文．平行沈線文？縄文 LR．	5－14	198
15	鉢	C1	3 層	小波状縁＋山形突起＋沈線．平行沈線文＋刺突充填＋α 字文．	5－15	210
16	鉢	C1	3 層	小波状縁＋山形突起 4 単位＋沈線．α 字文，刺点文．平行沈線文．台部磨き．下端帯状縄文．縄文 LR（縦かり）．	5－16	127
17	鉢	C2	3 層	小波状縁＋山形突起 1 単位？＋口押に沈線＋沈線．櫛歯状羽目．平行沈線．縄文 LR．	5－17	148
18	鉢	C2	3 層	小波状縁＋山形突起＋口押に沈線＋沈線．櫛歯状羽目．平行沈線文．縄文 RL．	5－18	167
19	鉢	C2	3 層	平縁＋ヘラ刻み＋沈線．櫛歯状羽目．平行沈線文．縄文 RL．	5－19	147
20	鉢	C2	3 層	小波状縁＋山形突起＋沈線．沈線文．縄文 RL．	5－20	162
21	鉢	不明	3 層	台部下端縄文帯．縄文 LR．	6－1	141
22	鉢	不明	検出	平行沈線文．	6－2	293

第 9 図　鉢 (2)

もの (21) がある。

浅鉢

器高 / 口径が 1/2 以下のものを浅鉢とした。いずれも口縁部内面に沈線が巡る。

浅鉢 A 類（第 11 図）

胴部が緩やかに内湾しながらそのまま口縁部が開き気味に立ち上がるか端部が短く直立するもの。いずれも平坦口縁で，2 ～ 4 は端部に突起を持つ。A1 類は胴部全体にπ字文や入組工字文が展開するもの (1・5) や，胴部上半に工字文が展開するもの (2 ～ 4) である。1 は台付で，台部に三角形・逆三角の透かしが 4 単位配される。A2 類は口頸部に平行沈線が巡るもの (6) で，皿に近い器形である。

浅鉢 B 類（第 12 図）

口縁部が直立気味に立ち上がり端部が外反するもの。いずれも頸部は無文帯となり，胴部上半に横楕円文・横 C 字状文・入組工字文的な雲形文が展開する。7 は平坦口縁，9 は突起の付く波状縁で口縁端部に刻みをもつ，8 は平坦口縁で口縁端部に突起と刻みをもつ。

浅鉢 C 類（第 12 図）

同上部が屈曲して頸部が内傾し，口縁端部が外反するもの。頸部が明瞭で，胴部上半に文様帯を持つ。平坦口縁 (11・18)，平坦口縁で端部に刻みや突起をもつもの (10・12・13・16・17)，波状縁で 2 個一対の突起をもつ (15・19) ものがある。C1 類は胴部に横楕円文や単純化した雲形文が展開するもので (10 ～ 15)，胴部上端にはメガネ状浮文や 2 個一対の突起と突起間沈線が配される。C2 類は胴部にπ字文や入組工字文が展開するもので (16 ～ 19)，16 は胴部上端にメガネ状浮文と 2 個一対の突起が配される。

壺

口径に対し胴部最大径が顕著に大きいものを壺とした。

壺 A 類（第 13 図 1 ～ 6）

頸部で屈折して口頸部が内傾して立ち上がり，口縁端部が外反，頸部が無文となるもの。A1 類は口縁部が無文で胴部に縄文が施されるのみのもの (1 ～ 3) である。いずれも平坦口縁で，3 は口唇部に沈線が巡る。A2 類は口縁部に突起やπ字文が配されるものである。4・5 は口縁内面に受け口状の段をもつ。6 は口縁内面に 2 状の沈線が巡り，肩部にπ字文が展開する。

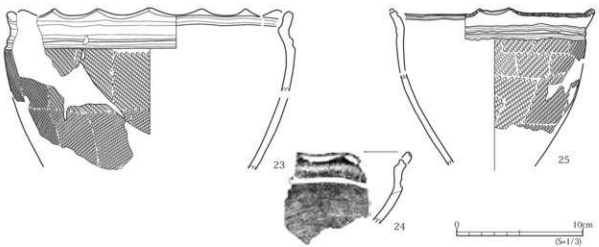
壺 B 類（第 13 図 7・8）

頸部で屈折して口頸部が直立気味に外傾して立ち上がるもの。平坦口縁で頸部無文，口唇部と口縁内面に沈線が巡る。

壺 AB 類（第 13 図 9 ～ 12・第 14 図 13 ～ 15）

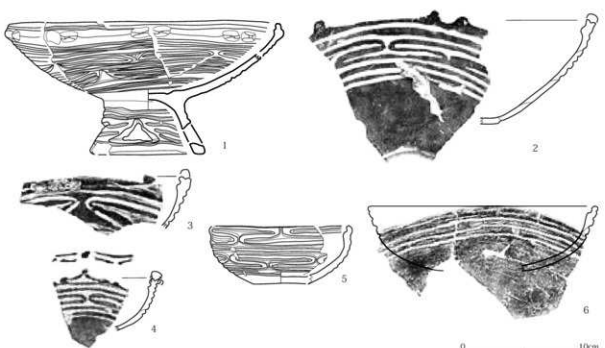
上記分類の体部と考えられるものである。いずれも胴上半に文様が展開し，下半は縄文ないし無文となる。9 ～ 11 は磨消縄文が展開するもので (AB1 類)，それぞれ横楕円文，Z 字状文，帯縄文が施される。12 は胴上部に巡る沈線の上下に縦長楕円文が並列する。13 ～ 15 はπ字文・入組工字文・工字文が施されるもので (AB2 類)，15 は四脚が付く。

壺 C 類（第 14 図 16 ～ 18）



No.	器種	分類	層	特徴	写真図版	登録 No.
23	鉢	D	3 層	小波状縁＋沈線、沈線文、羽状縄文 RL＋LR.	6－3	165
24	鉢	D	3 層	小波状縁＋沈線、沈線文、外面ミガキ.	6－4	189
25	鉢	D	堆積土	平縁＋２個一対の突起＋櫛歯状刻目＋沈線、平行沈線文、縄文 LR.	6－5	168

第 10 図　鉢 (3)

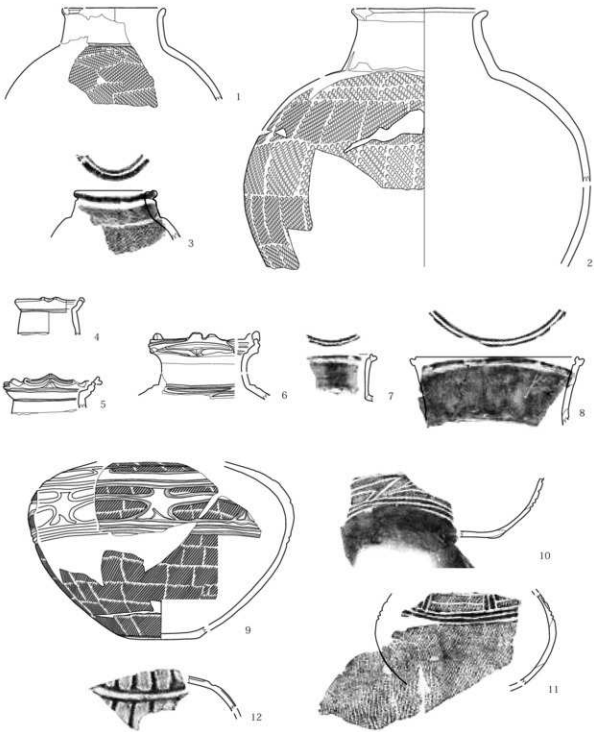


No.	器種	分類	層	特徴	写真図版	登録 No.
1	浅鉢	A1	検出	平縁＋沈線２個一対の瘤状、体部に平行沈線文＋ α 字文、三叉状透かし＋平行沈線文、内面底面に円文.	6－6	109
2	浅鉢	A1	3 層	平縁＋２個一対の突起＋口沿に沈線＋沈線、沈線文、工字文、 α 字文、平行沈線文、沈線内部に赤彩残る.	6－7	131
3	浅鉢	A1	3 層	平縁＋口沿に沈線＋２個一対の突起＋沈線、平行沈線、 α 字文、沈線内部に赤彩残る.	6－8	226
4	浅鉢	A1	2 層	平縁＋山形突起＋口沿に沈線＋２個一対の突起＋沈線山形突起部に二叉状差去、平行沈線文、入組工字文、平行沈線文.	6－9	257
5	浅鉢	A1	3 層	平縁＋沈線、入組工字文、 α 字文、内外面の沈線内部に赤彩残る.	6－10	132
6	浅鉢	A2	検出	平縁＋沈線、平行沈線文.	6－11	290

第 11 図　浅鉢 (1)

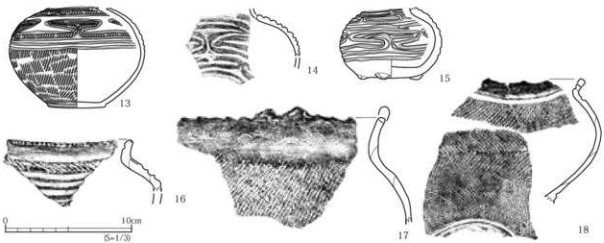
No.	器種	分類	層	特徴	写真図版	登録 No.
7	浅鉢	B	3 層	平縁＋沈線、平行沈線文、横楕円文（磨消縄文）、縄文 LR	6－12	220
8	浅鉢	B	3 層	平縁＋ヘラ刻み＋２個一対の突起（６単位）＋沈線、平行沈線文、横 C 字状文（磨消縄文）、平行沈線文、沈線文、縄文 LR or 付加縄文 LR＋R	6－13	142
9	浅鉢	B	3 層	大波状縁＋２個一対の突起＋口例に沈線＋ヘラ刻み＋沈線、平行沈線文、人組工字文的雲形文（磨消縄文）４単位、平行沈線文	6－14	145
10	浅鉢	C1	3 層	平縁＋ヘラ刻み＋２個一対の突起４単位＋沈線、平行沈線文、メガネ状浮文＋２個一対の貼瘤(8 単位)、横楕円文(磨消縄文)、平行沈線文、縄文 LR（縦かい）。	6－15	126
11	浅鉢	C1	3 層	平縁＋沈線、メガネ状浮文＋２個一対の貼瘤、横楕円文（磨消縄文）、縄文 LR。	6－16	239
12	浅鉢	C1	3 層	平縁＋ヘラ刻み＋２個一対の突起＋沈線、沈線文、２個一対の貼瘤、雲形文（磨消縄文）、平行沈線文、縄文 LR（縦かい）。	6－17	213
13	浅鉢	C1	検出	平縁＋ヘラ刻み＋沈線、平行沈線文、メガネ状浮文、雲形文（磨消縄文）３単位、縄文 LR。	6－18	143
14	浅鉢	C1	検出	雲形文（磨消縄文）。	6－19	287
15	浅鉢	C1	堆積土	小波状縁＋山形突起＋沈線、平行沈線文、メガネ状浮文＋貼瘤、平行沈線文、雲形文（ミガキ）、沈線内部に赤彩残る。	6－20	266
16	浅鉢	C2	3 層	平縁＋ヘラ刻み＋沈線、頂部直立、平行沈線文、メガネ状浮文＋２個一対の貼瘤、横 C 字＋π字文（磨消縄文）、平行沈線文、縄文 LR。	6－21	218
17	浅鉢	C2	3 層	平縁＋突起＋沈線平行沈線文、横 C 字＋π字文、平行沈線文、4 脚、赤彩。	6－22	123
18	浅鉢	C2	3 層	平縁＋沈線、平行沈線文、π字文？	6－23	223
19	浅鉢	C2	3 層	平縁＋山形突起＋２個一対の突起＋沈線、沈線文、人組工字文、4 脚	6－24	246

第 12 図　浅鉢 (2)



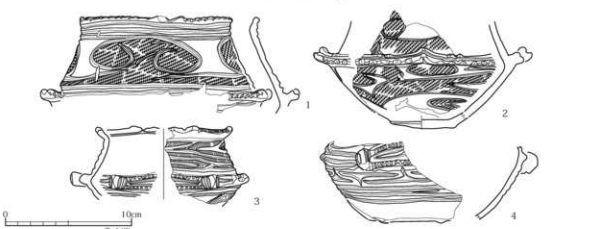
No.	器種	分類	層	特徴	写真図版	登録 No.
1	壺	A1	3 層	平縁。頸部ミガキ。体部羽状縄文 RL ＋ LR。	7－1	356
2	壺	A1	3 層	平縁＋頸部屈曲して内傾。体部との境に沈線状の段。縄文 RL。	7－2	156
3	壺	A1	3 層	平縁＋沈線。頸部内傾。沈線文。体部縄文 LR。	7－3	233
4	壺	A2	3 層	平縁＋2 個一対の突起＋沈線（受け口状）。頸部内傾。ミガキ。	7－4	361
5	壺	A2	3 層	平縁＋山形突起 1 単位（両脇に 2 個一対の突起を伴う）＋沈線。受け口状。平行沈線文。頸部の一部に赤彩残る。	7－5	119
6	壺	A2	3 層	平縁＋2 個一対の突起＋沈線。π 字文。沈線内部の一部に赤彩残る。	7－6	130
7	壺	B	2 層	平縁＋口拘に沈線＋沈線。頸部やや外傾 .口頸部ミガキ。	7－7	248
8	壺	B	3 層	平縁＋口拘に沈線＋沈線。体部との境に沈線。全面ミガキ。	7－8	237
9	壺	AB1	3 層	横格円文（磨消縄文）。平行沈線文。横格円文（磨消縄文）。平行沈線文。縄文 LR.	7－9	166
10	壺	AB1	3 層	Z 字状文（磨消縄文）。平行沈線文。4 脚（ほとんど突出していない）	7－10	125
11	壺	AB1	3 層	帯状文（磨消縄文）。平行沈線文。縄文 LR.	7－11	219
12	壺	AB	2 層	隆帯。沈線。	7－12	255

第 13 図　壺 (1)



No.	器種	分類	層	特徴	写真図版	登録 No.
13	壺	AB2	検出	π字文、入組工字文（磨消縄文）5 単位、平行沈線文、縄文 LR.	7－13	146
14	壺	AB2	堆積土	平行沈線文＋π字文、工字文（メガネ状）	7－14	267
15	壺	AB2	3 層	平行沈線文、メガネ状浮文、入組工字文、平行沈線文、4 腳.	7－15	118
16	壺	C	3 層	平縁＋ヘラ刻み＋沈線、藤原状刻目、平行沈線文.	7－16	199
17	壺	C	3 層	平縁＋ヘラ刻み（楕円形形去）＋ 2 個一対の突起、口頸部無文、体部縄文 LR.	7－17	197
18	壺	C	3 層	小波状縁＋沈線、沈線文、羽状縄文 LR ＋ 鼠、台付.	7－18	133

第 14 図　壺 (2)



No.	器種	分類	層	特徴	写真図版	登録 No.
1	注口	A	3 層	平縁＋ヘラ刻み＋ 2 個一対の突起 4 単位＋沈線、平行沈線文、雲形文（磨消縄文）4 単位、平行沈線文、小突起＋沈線＋ヘラ刻み、縄文 LR、縄文施文部・沈線内部に赤彩残る.	7－19	144
2	注口	A	3 層	頸部に雲形文（磨消縄文）、扁部突出＋山形突起 5 単位＋端部に沈線＋ 2 個一対の貼瘤 10 単位＋ヘラ刻み（押し付け）、雲形文（磨消縄文）、縄文 LR、縄文施文部・扁部隆帯などに赤彩残る.	7－20	244
3	注口	A	3 層	平縁＋ヘラ刻み＋ 2 個一対の突起 4 単位＋沈線、雲形文（磨消縄文）、山形突起（頸部刻み）＋小突起＋刻み＋沈線、体部雲形文、縄文 Lr、外面沈線内部・口縁部内面沈線内部に赤彩のこる.	7－21	128
4	注口	B	3 層	π字文、ヘラ刻み、突起、貼瘤、平行沈線文、沈線内部の一部に赤彩残る、内面ナデ、赤褐色付着物、4 腳.	7－22	129

第 15 図　注口

No.	器種	分類	層	特徴	写真図版	登録 No.
1	蓋	－	3 層	工字文、π地文、沈線内部に赤彩残る.	7－23	124
2	蓋	－	3 層	区分隆帯、工字文、沈線内部に赤彩残る.	7－24	238

第 16 図　蓋

頸部が湾曲して括れ，口頸部が外反するもの。波状口縁のもの (18) と，端部に刻みをもつ平坦口縁のもの (16・17) がある。18 は小型で頸部に平行沈線が巡る。 16 は頸部～肩部にかけて刻み目帯と平行沈線が巡る。17 は口縁端部に突起が付く。

注口（第 15 図）

注口部は残存していないが，形態から判断した。いずれも外面に赤彩の痕跡が認められる。

注口 A 類 (1 ～ 3) は頸部が内傾，口縁端部が外反する器形で，肩部に刻みや突起を持つ隆帯が巡り，頸部と胴部に雲形文が展開する。内面は磨かれている。

注口 B 類 (4) は壺形と推定されるもので瘤状の四脚をもつ。 肩部に 3 と同様の刻み目帯と突起をもち，その上下に π 字文が展開する。内面はナデで，注口が推定される箇所の内面下部に刻みがある。

蓋（第 16 図）

胴部全体に工字文が展開し，ともに赤彩の痕跡が残る。1 は口縁部に平行沈線が巡り x 字状の彫去による凹みが一箇所施される。胴部の工字文は下半が均等な 3 単位，上半が幅が 2:2:1 となる左右対称の 3 単位で，頂部には 3 条の短い並行沈線文が施される。2 は口縁が無文で胴部は区画隆帯で二分されるとみられる。

(2) 土製品

土偶・土版・管玉・ミニチュア土器・土製円盤があわせて 10 点出土し，すべてを掲載した。

ミニチュア土器 (第 17 図 1)

1 点出土した。壺形のミニチュア土器で無文である。

土製管玉 (第 17 図 2)

1 点出土した。小型・管状で端部に沈線が巡る。骨製管玉と類似する。

土偶 (第 17 図 3・4)

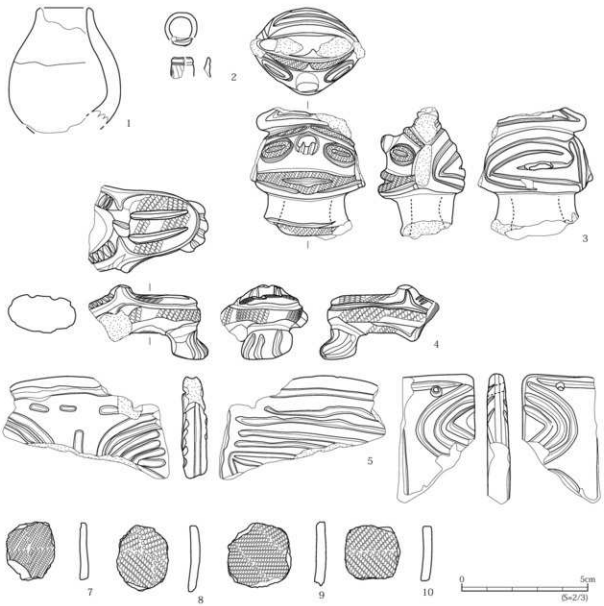
2 点出土した。3 は頭部で中空である。結った頭髪・眉・目・鼻・口が表現され，後頭部には中空部に達する貫通孔がある。頭頂部装飾・顔両側が欠損している。4 は左腕部で中実である。横に張り出した肩・短い腕・手が成形され，手には指の表現がある。胴部側破断面にタール状物質が付着しており補修の痕跡と考えられる。

土版 (第 17 図 5・6)

2 点出土した。ともに方形を呈すると考えられ，前面には正中線を表現したとみられる縦位沈線や左右対称の弧状の平行沈線が施される。5 は前面に刺突，側縁に沈線が配される。6 は上部に貫通孔，後面にも弧状の平行沈線が配され，弧状の平行沈線は上下 2 段になるとみられる。一部に赤彩の痕跡が残る。

土製円盤 (第 17 図 7 ～ 10)

4 点出土した。土器片の縁辺を打ち欠き円盤状に整形したものである。深鉢の胴部とみられ，LR や LR・RL の羽状縄文が施される。

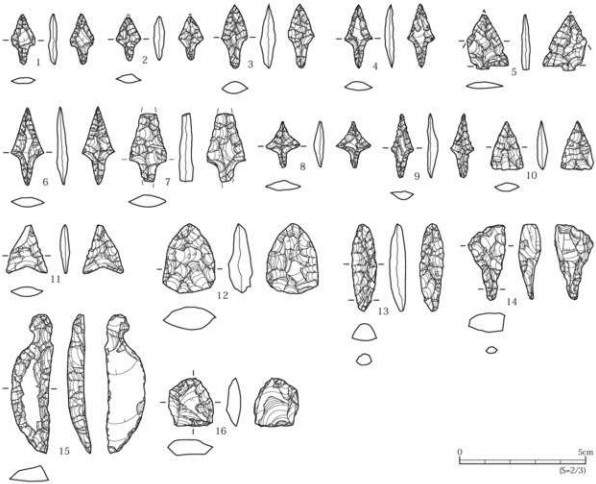


No.	器種	層	特徴	写真図版	登録No.
1	ミニチュア土器	3 層	無文	8－3	103
2	管玉	3 層	端部に沈線巡る	8－4	328
3	土偶	3 層	中空、貼った頭髪・眉・目・鼻・口の表現、眉・目・鼻・口に縄文 LR、後頭部に中空部までの貫通孔	8－1	102
4	土偶	3 層	指の表現、ｘ字文・刺み・沈線・縄文 LR 胴部破断面にタール状物質付着。	8－2	101
5	土版	堆積土	正面：縦位沈線（正中線）・横位沈線・刺突左右対称の弧状平行沈線、裏面：横位沈線、側縁：沈線	8－5	325
6	土版	検出	正面：縦位沈線、両面：横位沈線・弧状平行沈線・貫通孔、沈線内部の一部に赤彩の痕跡が残る。	8－6	104
7	円盤	3 層	縄文 LR	8－7	105
8	円盤	3 層	羽状縄文 LR・RL	8－8	106
9	円盤	3 層	縄文 LR	8－9	107
10	円盤	3 層	羽状縄文 LR・RL	8－10	108

第 17 図　土製品

(3) 石器

剥片石器は石鏃・尖頭器・錐・石匙・楔形石器・不定形石器・剥片・石核で計 90 点出土した。礫石器は石皿・磨石・凹石・敲石・砥石・錘で計 142 点出土した。礫石器は素材形態・使用痕跡から分類し、複数の用途に使用されたものについては、最も特徴的な使用痕跡により分類した。



No.	器種	分類	層	石材	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g	残存	特徴	写真図版	登録 No.
1	石鏃	A	2 層	珪質頁岩	19.9	9.2	3.2	0.37	完形		9－1	742
2	石鏃	A	3 層	玉髄	16.9	9.8	3.7	0.45	先端欠		9－2	756
3	石鏃	A	3 層	碧玉（黄）	24.8	10.5	6.0	0.96	完形		9－3	718
4	石鏃	A	3 層	珪質頁岩	25.2	10.6	3.6	0.65	完形		9－4	730
5	石鏃	A	2 層	珪質頁岩	21.3	17.3	3.3	0.85	先端・カエリ欠		9－5	738
6	石鏃	A	3 層	珪質頁岩	30.6	12.8	4.3	0.74	完形		9－6	722
7	石鏃	A	3 層	頁岩	26.8	15.0	16.2	1.81	先端・基部欠		9－7	755
8	石鏃	A	3 層	珪質頁岩	18.1	13.7	3.5	0.38	完形		9－8	699
9	石鏃	A	3 層	頁岩	25.1	8.8	4.0	0.47	完形		9－9	703
10	石鏃	B	3 層	碧玉（赤）	19.0	13.1	4.6	0.73	完形		9－10	723
11	石鏃	C	3 層	頁岩	19.9	16.2	3.7	0.75	先端欠		9－11	725
12	尖頭器	－	3 層	頁岩	27.7	20.6	8.1	4.24	完形		9－12	673
13	石鏃	A	3 層	珪質凝灰岩	34.5	9.7	6.6	1.15	完形		9－13	719
14	石鏃	B	3 層	珪質頁岩	30.6	13.9	8.8	3.01	完形		9－14	679
15	石匙	－	3 層	珪質頁岩	55.2	15.1	5.0	4.52	完形		9－15	299
16	模型石器	－	3 層	珪質頁岩	18.3	17.3	5.5	2.23	完形		9－16	724

第 18 図　剥片石器 (1)

石鏃 (第 18 図 1 ～ 11)

未成品・破損品を含め 47 点出土し，形態が明瞭なもののうち 11 点を図示した。基部が突出するもの (A 類)，直線的なもの (B 類)，基部に抉りを入れ逆刺を作出しているもの (C 類) があり，A 類が 27/32 で主体である。石材は頁岩・珪質頁岩が 40/47 で大半を占め，他に玉髄・碧玉・珪質凝灰岩・黒曜石がある。

尖頭器 (第 18 図 12)

1 点出土した。石鏃よりも大型で厚みがある。石材は頁岩である。

石錐 (第 18 図 13・14)

未成品を含め 8 点出土し，うち 2 点を図示した。両端に尖頭部を有する棒状のもの (A 類) と尖頭部は一端のみでつまみとなる基部をもつもの (B 類) があり，B 類が 5/8 で多い。石材は珪質頁岩が 5/8 で多く，他に頁岩・玉髄・珪質凝灰岩がある。

石匙 (第 18 図 15)

1 点出土した。つまみ部に対して先端部が縦方向に長い縦型のもので，鋭い先端をもつ。石材は珪質頁岩である。

石篦

珪質頁岩製で石篦の欠損品とみられるものが 1 点出土している。

楔形石器 (第 18 図 16)

両極打法による剥離面が認められるもので 2 点出土した。ともに対になる 2 辺 1 組に両極剥離痕が線状に認められるもので，うち 1 点を図示した。石材は珪質頁岩である。

不定形石器

二次加工が施されるが，上述の定型的器種に該当しないものである。大きさ・石材が大きく異なる 2 種が存在し，小型で緻密な石材の剥片を素材とする上記剥片石器と同系統のもの (A 類)，大型で粘板岩製のもの (B 類) に大別される。

A 類は 6 点出土した。いずれも剥片の両面ないし片面の縁辺のみに二次加工を施し，素材面を大きく残すもので，長さが 19 ～ 30mm と小型である。二次加工がほぼ全周に及ぶものが 2 点，2 辺ないし 1 辺に施されるものが 4 点ある。

B 類は 7 点出土し，うち加工が進んでいる 3 点を図示した (第 19 図 17 ～ 19)。いずれも片面に自然面を大きく残す扁平に割った粘板岩の円礫を素材とし，縁辺に二次加工を施したものである。大型ものでは簡易的な刃部作出を意図したと推定されるが (17)，小型の 18・19 は円形や石斧形に整形するためと考えられる。

剥片・石核 (第 19 図 20)

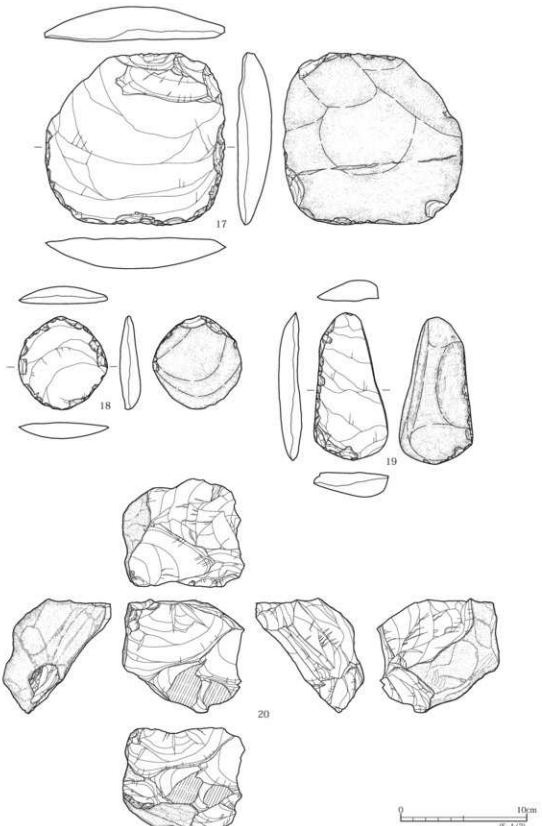
剥片は頁岩・珪質頁岩製が 11 点，黒曜石製が 3 点出土した。石核は 3 点出土し，うち珪質頁岩製で大型のものを図示した。他は赤色の碧玉製で小型である。

石皿 (第 20・21 図)

地面に置き，対象物を擦る目的で使用されたと考えられるもの。15 点出土し，うち 6 点を図示した。 1 は特殊な石皿で，やや扁平な円礫の上面に楕円形の溝状の磨面が巡るものである。これ以外は平坦あるいは浅い皿状に凹む磨面を有するもので，素材形状は厚板状 (2)，薄板状 (3)，扁平な円礫 (4 ～ 6) がある。これらには赤色顔料が付着するものが 2 点，被熱の痕跡が認められるものが 2 点ある。石材は凝灰岩・ホルンフェルス・粘板岩などが偏りなく利用されている。

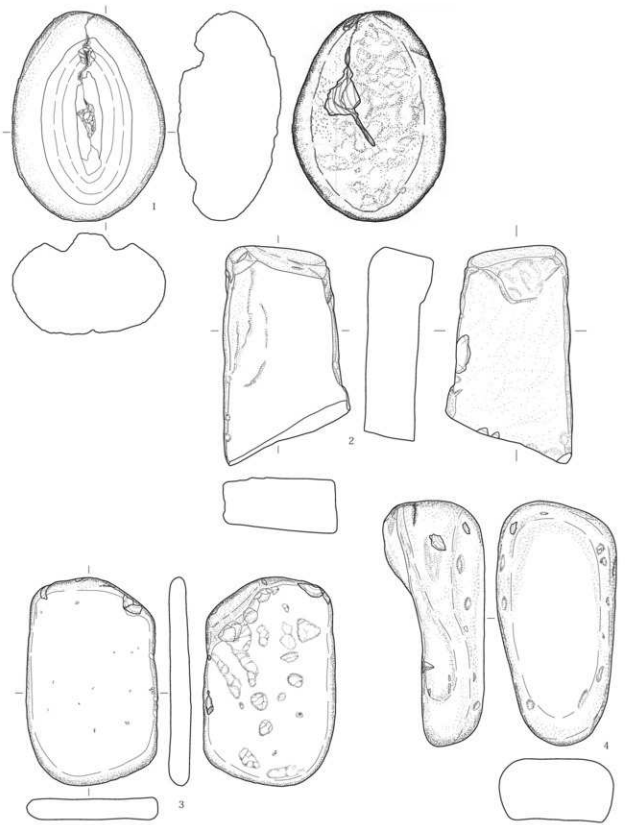
磨石 (第 22 図・23 図 15 ～ 17)

石皿以外で磨面を有するもので，磨面が明瞭な A 類と，全体に摩滅し不明瞭な B 類とがある。A 類は 63 点出土し，うち 11 点を図示した。円礫や扁平な円礫を素材とし両面ないし片面に磨面をも



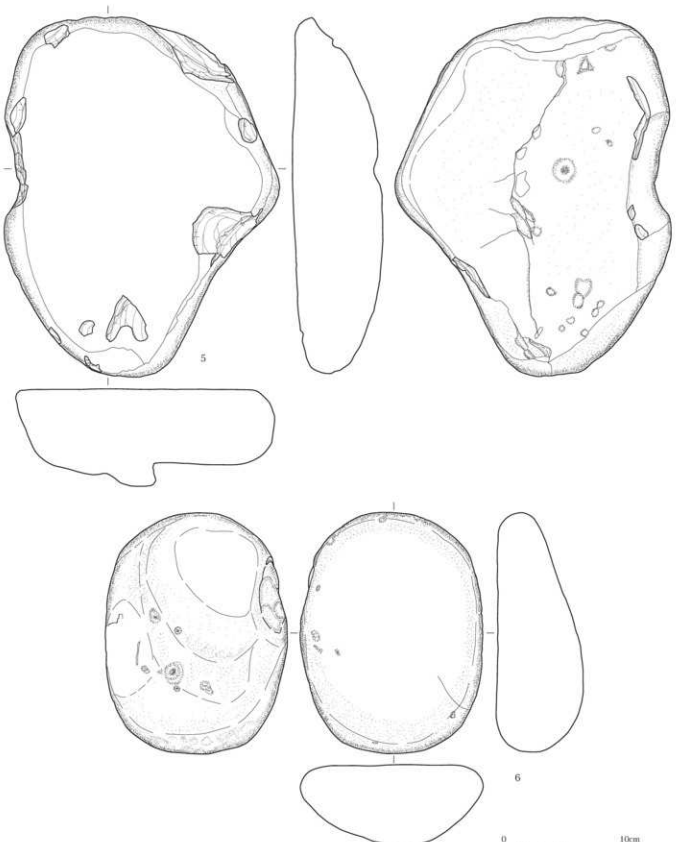
No.	器種	分類	層	石材	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g	残存	特徴	写真図版	登録 No.
17	不定形石器 B	—	3 層	粘板岩	137.5	142.5	27.2	650	完形		9－17	308
18	不定形石器 B	—	2 層	粘板岩	74.2	70.5	16.3	80	完形		9－18	321
19	不定形石器 B	—	3 層	粘板岩	117.4	58.9	19.0	130	完形		9－19	315
20	石核	—	3 層	珪質頁岩	91.2	96.6	86.3	590	完形		9－20	313

第 19 図　剥片石器 (2)



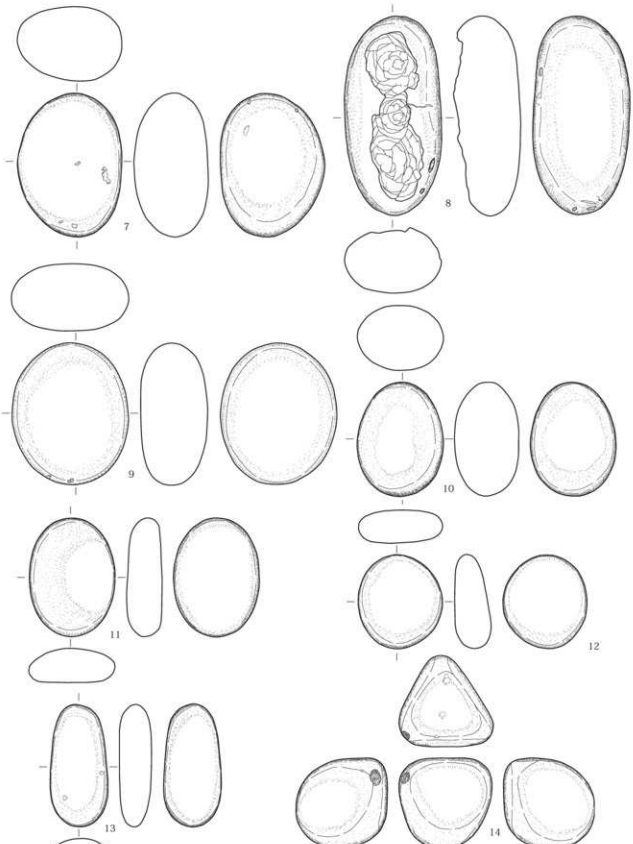
No.	器種	層	石材	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	残存	特徴	写真図版	登録No.
1	石皿	3層	礫岩	166.5	122.4	81.6	1920	完形	楕円形の溝	10－1	296
2	石皿	3層	ホルンフェルス	176.0	102.9	55.0	1270	一端欠	両面に擦り面	10－2	578
3	石皿	2層	安山岩質凝灰岩	165.7	103.7	17.9	540	完形	両面に擦り面	10－3	634
4	石皿	3層	粘板岩	195.7	93.6	81.3	1910	完形	片面に擦り面	10－4	608

第 20 図　石皿 (1)



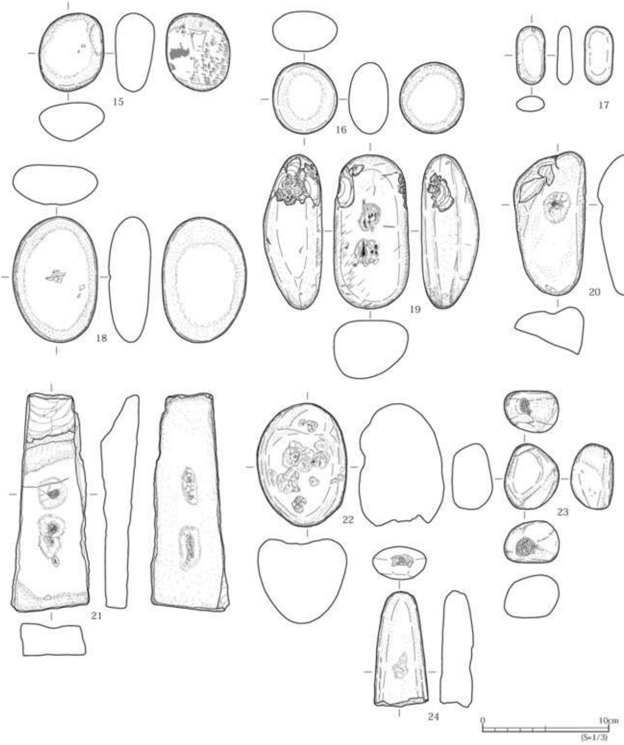
No.	器種	層	石材	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	残存	特徴	写真図版	登録No.
5	石皿	3層	安山岩質凝灰岩	283.5	219.0	76.8	5320	完形	片面に擦り面。背面中央に凹み	11－1	318
6	石皿	3層	安山岩	191.5	145.3	64.8	2530	完形	両面に擦り面。背面に凹み。被熱	10－5	508

第 21 図　石皿 (2)



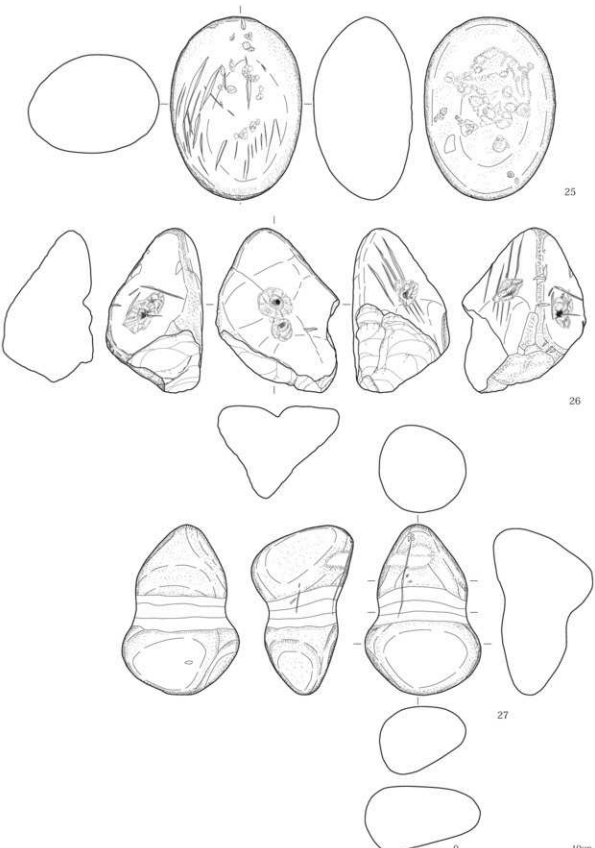
No.	器種	層	石材	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	残存	特徴	写真図版	登録No.
7	磨石A	3層	安山岩	113.0	83.1	58.2	820	完形	両面に擦り面	11－2	504
8	磨石A	3層	安山岩	156.5	176.4	51.0	1010	一部欠	両面に擦り面、片面大きく剥けはじけ	11－3	314
9	磨石A	3層	砂岩	112.7	93.1	52.2	790	完形	両面の中央付近に弱い擦り面	11－4	581
10	磨石A	1・2層	花崗閃岩	8.8	68.2	51.0	460	完形	両面に擦り面	11－5	322
11	磨石A	1・2層	安山岩	93.4	68.0	38.1	280	完形	両面に擦り面	11－7	323
12	磨石A	3層	安山岩	73.0	66.8	28.6	200	完形	両面に擦り面、被熱	11－8	507
13	磨石A	3層	安山岩	95.2	46.0	24.8	190	完形	両面に擦り面	11－9	503
14	磨石A	3層	安山岩	72.8	72.3	68.6	510	完形	多面体状、各面に擦り面、端部に敲打痕、ザラザラとした使用面	11－6	543

第22図　磨石(1)



No.	器種	層	石材	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	残存	特徴	写真図版	登録No.
15	磨石A	3層	粘板岩	63.4	52.2	30.5	130	完形	両面に擦り面。縁辺に敲打痕。片面は擦痕が顕著。両面に赤色顔料付着	12－1	566
16	磨石A	2層	安山岩質凝灰岩	56.0	51.7	31.9	140	完形	両面に擦り面。全面に赤色顔料付着	12－2	624
17	磨石A	3層	安山岩	45.6	22.1	12.0	20	完形	片面に擦り面	12－3	698
18	磨石→凹石	2層	粘板岩	98.6	66.7	32.0	310	完形	両面に擦り面。表中央に線上の凹み（両極の台石？）	12－4	320
19	凹石→磨石	4層	粘板岩	121.0	59.3	45.9	520	完形	正面の中軸上の2ヶ所に凹み。両側面の上端に敲打集中(敲きではなく基部加工)。凹み→磨り面・摩滅.	12－5	645
20	凹石	3層	砂岩	113.7	56.5	36.5	250	一部欠	正面に凹み。背面に浅い凹み。端部の一部に敲打痕	12－6	607
21	凹石	3層	ホルンフェルス	173.0	60.9	28.5	430	完形	両面に凹み。被熱	12－7	577
22	凹石→磨石	3層	砂岩	98.0	70.0	67.5	590	完形	片面に擦り面と凹み	12－8	547
23	敲石	3層	珪質凝灰岩	50.7	43.5	33.3	120	完形	上下端に敲打痕。一側面にザラザラとした使用面.	12－9	554
24	敲石・凹石	検出	粘板岩	91.3	41.5	25.6	150	半欠	端部に敲打痕。正面に浅い凹み状の敲打痕。背面被熱による剥落か。	12－10	654

第 23 図　磨石 (2)・凹石・敲石



No.	器種	層	石材	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	残存	特徴	写真図版	登録No.
25	磨石→凹石	3層	凝灰岩	142.5	101.0	78.0	1370	完形	磨石→凹石	12－11	507
26	磨石→凹石	3層	砂岩	137.5	97.0	76.2	830	一部欠	2面に凹状の凹み→多面体状の各面に凹み。	12－12	611
27	錘	3層	安山岩質凝灰岩	132.0	88.1	69.8	920	完形	くびれを持つ	12－13	310

第24図　砥石・錘

つもの (7 ～ 13) や，多面体状の各面に磨面をもつもの (14)，小型のもの (15 ～ 17) があり，円礫が大半を占める。小型の 15・16 には赤色顔料が付着する。また被熱の痕跡が認められるものが 6 点ある。石材は安山岩・粘板岩・凝灰岩が多く，特に安山岩は 32/63 と半数を占める。B 類は 50 点出土した。使用の程度は不明であるが，意図的に遺跡に持ち込まれたと考えられる。A 類同様で円礫が大半を占めるが，石材は粘板岩が 29/50 と集中する傾向がある。また 1 点に被熱の痕跡がみられた。

凹石 (第 23 図 18 ～ 22)

敲打による凹みを有するもの。7 点出土し，うち 5 点を図示した。凹みが長軸上に単独 (18・20) ないし複数が列状に配されるもの (19・21) と，分散する複数の凹みが互いに連結するもの (22)，側面にも凹みをもつものがある。19 は上部両側縁に集中的な敲打が認められ基部加工と考えられる。石材は砂岩・粘板岩・ホルンフェルスで砂岩が 4/7 で多い。

敲石 (第 23 図 23・24)

敲打痕を有するもので 2 点出土した。23 は多面体状の円礫を素材とし両端に敲打痕，右面にザラザラとした使用面をもつ。24 は縦長で端部に敲打痕をもち，長軸上に浅い凹みをもつ。

砥石 (第 24 図 25 ～ 26)

直線的な溝状の凹みを有するもので 2 点出土した。円礫や角礫を素材とし，平行する溝状の凹みの集中が複数箇所認められる。ともに凹石へと転用されている。

錘 (第 24 図 27)

1 点出土した。中央が括れ，括れ部分は表面がやや粗く色調が異なる。綱を付け錘として使用されたと推測される。

(4) 石製品（第 25 図）

石刀・石棒・円盤状石製品・石製小玉で 19 点出土した。

石刀・石棒

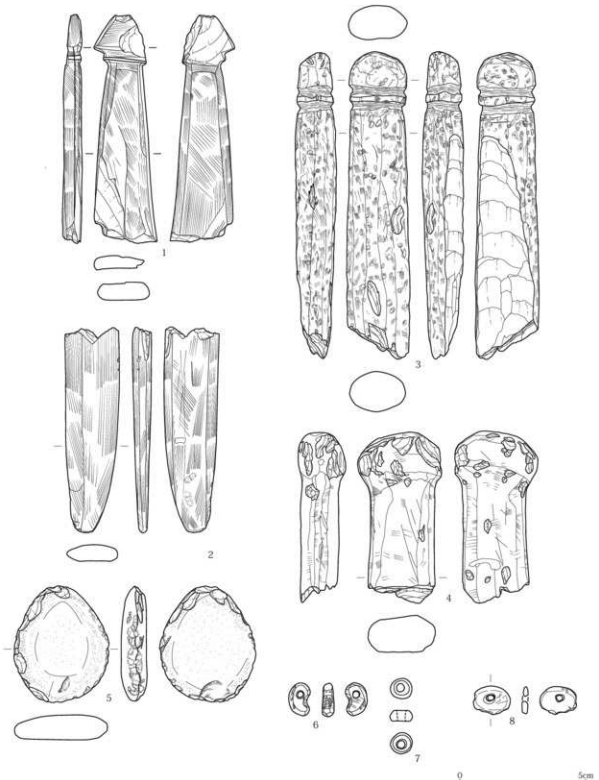
断面円形のものを石棒，断面偏平のものを石刀とした。いずれも粘板岩製である。石刀 2 点，石棒 3 点，およびこれらの未製品が 5 点出土し，うち形態的特徴をよく示す 4 点を図示した。1・2 は石刀の頭部と身部で全面が丁寧に研磨されている，頭部下端が張り出し直下に段が付き，身部は直線的な側が刃部状に薄くなる。3・4 は石棒の頭部で頭部と身部の境に沈線や段が付く。全体が研磨されているが敲打痕が残る。

円盤状石製品

2 点出土し，1 点を図示した。扁平な粘板岩円礫の周縁に剥離，敲打を加え円形に整形したものである。

石製玉

珪質凝灰岩製のものは勾玉状のものが 1 点，小玉が 3 点出土し，それぞれ 1 点を図示した。緑がかった石を利用し，全体が丁寧に研磨されている。粘板岩製のものは 1 点で，赤褐色の小型扁平の石の中央に穿孔したしものである。



No.	器種	層	石材	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	残存	特徴	写真図版	登録No.
1	石刀	3層	粘板岩	121.4	33.8	15.0	54.58	頭部	頭部下端に段、全面研磨。	8－11	298
2	石刀	検出	粘板岩	108.8	29.6	10.3	47.44	先端部	全面研磨、刃部作出。	8－12	302
3	石棒	検出	粘板岩	162.2	32.9	22.4	170.8	頭部	頭部下端に２条の沈線、敲打痕残る。	8－13	303
4	石棒	検出	粘板岩	91.1	44.6	25.0	125.19	頭部	頭部下端に段、敲打痕残る。	8－14	305
5	円盤状石製品	3層	粘板岩	62.3	50.6	13.9	59.36	完形	縁辺うちかき→敲打	8－15	732
6	玉	3層	珪質凝灰岩(緑)	13.2	7.8	4.5	0.86	完形	勾玉状、全面丁寧に研磨。	8－16	602
7	玉	3層	珪質凝灰岩(緑)	9.0	8.5	4.5	0.49	完形	全面丁寧に研磨。	8－17	701
8	玉	3層	粘板岩（赤）	14.8	11.3	2.5	0.41	完形	扁平。	8－18	726

第 25 図　石製品

(5) 骨角器

釣針・鏃・銛頭・組み合わせ式ヤス・ヤス・刺突具・篦・棒状角製品・弭・簪・垂飾・装飾品・管玉・貝輪・不明製品・骨製品素材が計 104 点出土した。

釣針（第 26 図 1）

1 点出土した。湾曲部が残存している。鹿角製で全体が研磨されている。

鏃（第 26 図 2）

鏃身より細くなった茎部が作出されるもので，1 点出土した。茎部と鏃身の一部が残存している。鹿角製で全体が研磨されている。鏃身下端から茎部にはタール状の付着物が残存しており，矢柄に固着するためのものとみられる。

銛頭（第 26 図 3）

逆刺をもち索綱を取り付けるための加工が施されるもので 3 点出土し，1 点を図示した。いずれも鹿角の先端を利用し，柄を差し込む閉窩式ソケットをもち，索綱を通す孔が穿たれるもので，逆刺が残存しているものはともに逆刺が 2 尖となる。

ヤス（第 26 図 6 ～ 12）

逆刺をもつ刺突具で，組み合わせ式のものと単式のものがある。組み合わせ式は，基部に，器体に対し斜めの着柄面を持ち，柄先に複数を組み合わせて取り付け，獲物を挟み込むなどして使用されたと考えられるものである。7 点出土し，うち 3 点を図示した (6 ～ 8)。7・8 は本体部分で，図示していない 4 点も含め鹿角製で，基部片側に平らな着柄面と反対側に抉りをもつ。6 は別付け式の逆刺で基部側にタール状物質が付着しており，本体先端に差し込まれていたと考えられる。

単式のものは，単体を柄に固定して使用したものである。なお基部が残存しておらず銛頭との区別がつかないものもこれに含めた。13 点出土し，うち 4 点を図示した (9 ～ 12)。12 は基部が尖り，柄に差し込むための基部加工とみられる。すべて鹿角製で，両側に複数の逆刺をもつものがほとんどで，片側のものは 1 点のみである。

刺突具（第 27 図 13・14）

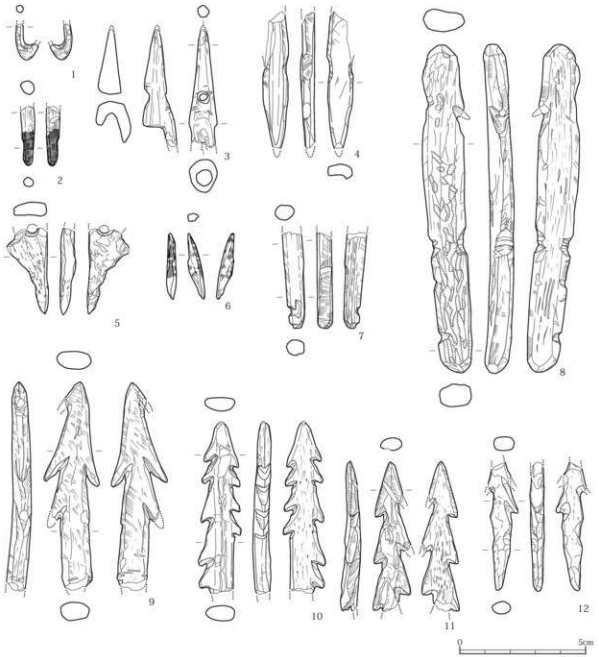
柄に取り付けて使用したもの (A 類) と単体で使用したもの (B 類) がある。

A 類は両端に尖端をもつが，片方がより鈍角で柄に差し込むための基部加工と考えられるもので，5 点出土し 1 点を図示した。全面研磨により棒状に整形されており，鹿角製や大型獣長管骨製のものがある。13 は基部側にタール状物質が付着する。

B 類は尖端をもち，着柄のための基部加工をもたないもので，2 点出土し 1 点を図示した (14)。ともに大型獣長管骨の縦長破片の鋭い端部をそのまま尖端として利用したものである。14 は尖端を錐として利用したとみられる。

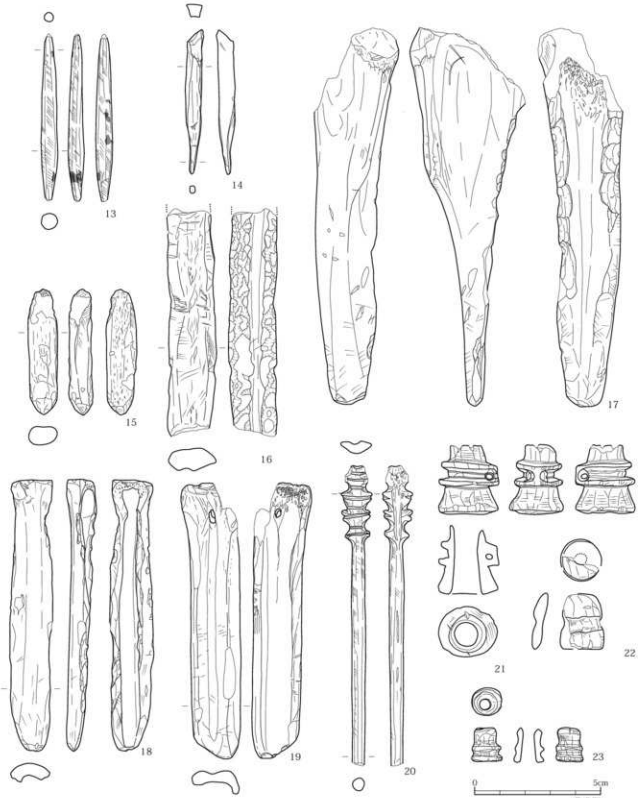
篦（第 27 図 17 ～ 19）

器体が扁平に成形され，刃部をもつもので，10 点出土し 3 点を図示した。いずれも骨製で，部位がわかるものではシカ中手 / 中足骨製 (18・19) が 7 点，シカ脛骨製 (17) のものが 2 点である。前者では中足骨を前後に分割した後面を利用したもの (19) が多く，刃部を剥離によって整形，近位端



No.	器種	層	素材	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	残存	特徴	写真図版	登録No.
1	釣針	3層	鹿角	14.4	8.8	3.0	0.26	遠部先端欠	全面研磨	13－1	434
2	銛	3層	鹿角	23.6	5.7	4.1	0.39	先端欠	基部作出、断面円形、基部に黒色付着物わずかに残る、全面研磨	13－2	416
3	銛頭	3層	鹿角	47.0	11.1	14.0	2.48	逆刺部欠	閉鎖式・有孔型（横方向）、逆刺部２実	13－3	2
4	銛頭？	3層	大型哺乳類	54.3	10.0	5.9	2.49	基部	両側に抉り、	13－4	64
5	不明（鉤先？）	3層	鹿角	34.2	16.5	6.4	1.36	基部	装着面平坦、貫通孔	13－5	65
6	組み合わせヤス	3層	大型哺乳類	26.2	6.7	3.1	0.43	完形	逆刺状付型の逆刺、黒色付着物、差し込み式か、	13－7	63
7	組み合わせヤス	3層	鹿角	37.9	8.7	6.5	1.97	基部	基部外側に溝、全面研磨、着柄面平坦、黒色付着物残る、	13－6	435
8	組み合わせヤス	3層	鹿角	130.1	20.1	9.1	16.58	逆刺欠	基部外側に溝、自然面大きく残る、	13－8	10
9	ヤス	3層	鹿角	82.8	22.3	7.3	7.51	基部欠	両側に逆刺、全面研磨、	13－11	5
10	ヤス	3層	鹿角	68.0	17.0	6.0	5.14	基部欠	両側に逆刺、全面研磨、一部に自然面残る、	13－10	8
11	ヤス	3層	鹿角	41.4	15.0	4.9	3.33	基部欠	両側に逆刺、全面研磨、研磨痕顕著、自然面残る、	13－9	7
12	ヤス	3層	鹿角	50.7	11.3	5.1	2.07	先端欠	両側に逆刺、全面研磨、表面風化、	13－12	406

第 26 図　漁労具



No.	器種	層	素材	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	残存	特徴	写真図版	登録No.
13	若林式刺突具	3層	鹿角？	66.6	6.7	6.6	1.99	ほぼ完形	全面研磨。基部研磨痕顕著。基部に黒色付着物。	13－13	402
14	刺突具	3層	大型脂質骨	57.6	7.9	3.1	1.87	完形	先端摩滅。錐として利用か。	13－14	66
15	棒状角製品	3層	鹿角	49.8	12.6	7.2	4.85	半分欠	全面研磨。一部白然面残る。	13－15	45
16	棒状角製品	3層	鹿角	90.3	19.8	9.2	12.31	両端欠	内面一側面を研磨。表面に白然面を大きく残す。	13－16	51
17	篦	3層	シカ？脛骨	150.1	45.4	33.6	34.37	基部欠	スパイラル割れした骨を二次加工により篦状に整形したものを利用。先端部摩滅。傷多数。	13－17	62
18	篦	3層	シカ中手骨	107.7	18.3	11.8	11.68	完形	内外に分割した素材を利用。端部摩滅・傷。	13－18	13
19	篦	3層	シカ中足骨	109.8	23.4	9.2	11.96	基部一部欠	前後に分割した素材を利用。端部剥離・摩滅・傷。	13－19	56
20	簪	3層	シカ中手／中足骨	119.0	12.0	5.1	5.36	先端欠	頭部に4段の節状装飾。全面磨かれ光沢。軸管残る。	14－1	1
21	弭	3層	鹿角	27.5	23.5	20.1	5.62	ほぼ完形	丁寧に彫刻加工されている。貫通孔。内面に黒色付着物。	14－2	11
22	弭	3層	鹿角	22.0	17.5	－	1.31	1/3	溝が一条巡る。	14－3	413
23	弭	3層	鹿角	13.8	12.1	11.1	1	完形	小型。節状装飾。	14－4	414

第27図　刺突具・篦・簪・弭

を基部として残す。後者はいずれも脛骨前面の隆起部（脛骨粗面～前縁）周辺を利用しており，隆起部を握りとしたと考えられる。

棒状角製品（第 27 図 15・16）

鹿角を扁平な棒状に整形し鈍い尖端を作出したもので，3 点出土し 2 点を図示した。15 は研磨が全面に及んでいる。16 は研磨は内面が主体で角表面がそのまま残る。

弭（第 27 図 21 ～ 23）

鹿角先端部を利用し，髄を刳り貫いたソケットをもつもので，6 点出土し 3 点を図示した。外面に溝を一条巡らすのみのもの (22)，隆起帯を作り出すもの (21・23) がある。21・22 の内面にはタール状物質が付着する。

簪（第 27 図 20）

1 点出土した (20)。シカ中手 / 中足骨製で，頭部に溝と抉りによる節状の装飾があり，全体が丁寧に研磨され光沢を帯びる。

垂飾（第 28 図 24 ～ 28）

装飾品と考えられるもので貫通孔のあるなど吊り下げたと考えられるもの。素材は猪牙・骨・サメ椎骨・貝がある。猪牙製のものは 4 点出土し 2 点を図示した。いずれも短冊状で，両端に穿孔したもの (24・25)，3 個以上の孔をもつものがある。骨製のものは 3 点出土し 1 点を図示した。大型獣の肋骨製とみられ短冊状に整形し両端に穿孔したもの (26) が 2 点，小型板状で中心に穿孔したものが 1 点である。サメ椎骨製のものは 1 点で中央に孔をもち，一部に赤彩が残る (28)。貝製のもの (27) は 1 点でカサガイ目とみられ，弧状の一端に孔をもつもので，貝輪の転用とみられる。

装飾品（第 28 図 29 ～ 31）

骨や鹿角に溝や刻みなどの装飾的加工を施したもので 9 点出土し 3 点を図示した。29 は鹿角の尖端に複数の溝を巡らしたもの，30・31 はイノシシ中足骨の近位側に 2 条の溝を刻んだものである。

管玉（第 28 図 32・33）

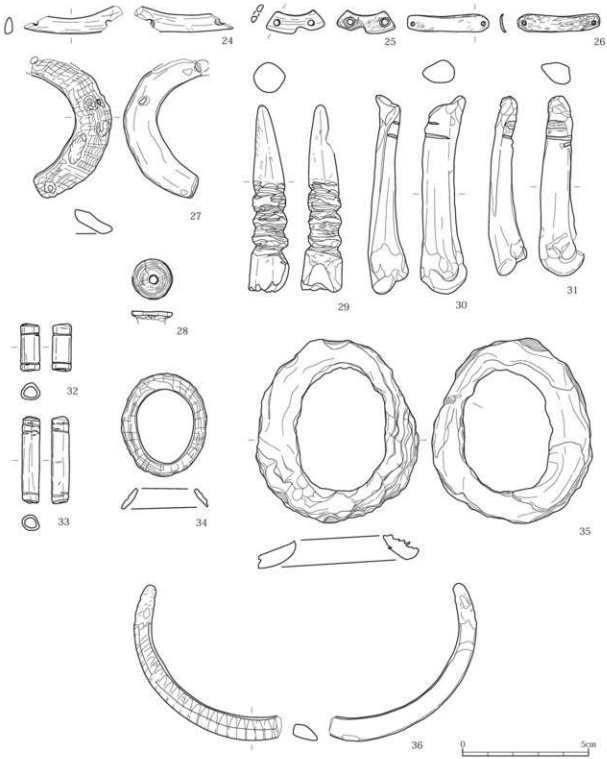
鳥の長管骨を短い管状に加工したもので，4 点出土し 2 点を図示した。いずれも両端に溝が巡る。

貝輪（第 28・29 図 34 ～ 37）

貝の中央部を刳り貫き環状としたもので 10 点出土した。素材はベンケイガイが 6 点，イタボガキが 2 点，カサガイ目が 2 点で，うち 4 点を図示した (34 ～ 37)。ベンケイガイ製のもの (36・37) は全面が丁寧に研磨されている。カサガイ目製のもの (34) はいずれも内径短軸が 30mm 未満と腕輪とするには小さい。

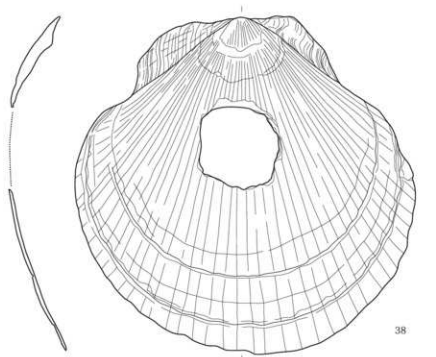
不明製品（第 26・29 図）

4 は両側に抉りをもち柄に装着するための基部加工が施されるもので骨製である。先端が欠損しているが銛頭の可能性がある。5 は組み合わせ式ヤスと同様の基部加工をもつもので，器体に穿孔がある。上部が欠損しており詳細は不明であるが，組み合わせ式ヤスや柄に取り付ける鈎先と考えられる。38 はホタテガイの中央が円形に穿孔されている。ほかに，刺突具 A 類や簪の破損品とみられる棒状製品が 2 点出土しており，ともに被熱し黒色～白色化している。



No.	器種	層	素材	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g	残存	特徴	写真図版	登録 No.
24	猪牙製垂飾	3 層	イノシシ犬歯	10.4	39.0	3.1	1.08	両端一部欠	両端に貫通孔.	14－6	68
25	猪牙製垂飾	3 層	イノシシ犬歯	9.1	23.4	1.8	0.64	完形	両端に貫通孔.	14－5	415
26	垂飾	3 層	大型哺乳骨近位？	7.1	32.8	0.9	0.51	完形	両端に貫通孔.	14－7	444
27	垂飾	3 層	カサガイ目？	55.0	14.1	5.5	9.12	一部欠	貝輪→破損→端部研磨・一端に穿孔→貫通孔破損.	14－8	446
28	垂飾	2 層	サメ椎骨	16.1	16.1	4.2	0.3	1/2	中央に貫通孔. 赤彩.	14－9	22
29	装飾品	3 層	鹿角先端部	74.2	15.7	12.0	8.87	完形	5 条の溝が巡る.	14－13	21
30	装飾品	3 層	イノシシ中足骨第 5	79.1	18.5	9.0	8.38	完形	近位部に溝 2 条.	14－14	41
31	装飾品	3 層	イノシシ中足骨第 2	71.2	17.9	8.5	6.34	完形	近位部に溝 2 条.	14－15	42
32	管玉	3 層	鳥骨	18.7	7.5	6.9	0.56	完形	両端に溝.	14－10	438
33	管玉	3 層	鳥骨	34.3	6.8	6.4	1.07	完形	両端に溝.	14－11	424
34	貝輪（垂飾）	3 層	カサガイ目	41.0	34.2	8.7	2.75	完形	内径長軸 29mm，短軸 22mm.	14－12	70
35	貝輪	3 層	イタボガキ	73.0	65.0	13.5	24.11	完形	殻頂部残る.	14－16	16
36	貝輪	3 層	ベンケイガイ	62.9	58.5	6.8	8.26	1/3	全面丁寧に研磨.	14－17	18

第 28 図　垂飾・装飾・貝輪 (1)



No.	器種	層	素材	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g	残存	特徴	写真図版	登録 No.
37	貝輪	3 層	ベンケイガイ	39.5	81.4	4.8	7.94	1/3	全面丁寧に研磨，殻頂側．	14－18	17
38	穿孔貝	3 層	ホタテガイ	134.4	135.2	22.9	80.36	完形	内径孔幅 32mm．	14－19	19

第 29 図　貝輪 (2)・穿孔貝

骨製品素材

分割・切断・剥離などの明らかな加工の痕跡がみとめられ，骨角製品の素材や未成品と考えられるものが 14 点出土している。シカ中手 / 中足骨を縦方向に 1/2 ないし 1/4 に分割し縁辺に剥離を加えたものが多く，錐や刺突具 A 類，箆の素材と考えられる。ほかに切断痕跡のある鹿角，薄く剥離された猪牙などがある。

3. 動物遺存体

1. 分析方法

(1) 試料の採取

試料を現場で目視で取り上げる（目視試料）ほか、2・3・6 層については土壌サンプルを土嚢袋でそれぞれ 31，148，11 の計 190 袋採取した。採取した土壌サンプルは水洗篩にかけて試料を分

離した。4mm・2mm・1mm メッシュ上で分離した '4mm 試料'・'2mm 試料'・'1mm 試料' がある。4mm 試料については全てを貝・骨・炭化物・遺物・礫などに分類し，重量を量った。

第 2 表　試料抽出状況

		目視							4mm	2mm	1mm	計
		表採	梢川	1～2 層	1～4 層	2 層	3 層	4 層	3 層	3 層	3 層	
大型獣	頭部・遊離歯・角		9		4	8	156		33			210
	四肢骨		17	4	10	30	319	6	53			439
	椎骨・肋骨ほか	1		1	5	1	189	1	35			233
中型獣					1		23	1	38			63
小型獣							2		8	7		17
海獣類				1			7					8
鳥類			2		1	1	49		51	1		105
両生類・爬虫類							1		16	3		20
魚類			4			6	58		39	187	214	508
脊足動物・貝類									2			2
不明									1			1
計		1	32	6	21	46	804	8	276	198	214	1606

(2) 試料の抽出

今回は確認調査であることや細かな分層発掘が行われていないことなどから，分析対象を絞り込むこととした。抽出を行う試料は，目視試料についてはその全て，4mm 試料については分析サンプルとして選択した 11 点のサンプル（No.3,9,12,28,29,31,32,33,34,65,75。いずれも 3 層），2・1mm 試料については分析サンプルのうち 1 点（No.9）の全量とした。ただし，貝類と魚類については点数が多いため，4mm 試料についても No.9 のみとした。これらの中から，貝類では殻頂部を残すもの，魚骨では，残存率が高く魚種の特徴をよく示す部位，鳥獣骨では関節部や端部・歯などを抽出した（第 2 表）。

(3) 同定と数量化

貝類は殻頂部を，魚類は各部位の中で特徴的な部分を残すものをカウントした。鳥獣類については，詳細な同定・観察を行う部位を限定し（後述），部位中の残存部分，骨端部の癒合状況・成長度も記録した。これら以外の部位は大まかな分類のみにとどめた。同定した試料については，切創 (カットマーク)，打割痕 (スパイラル割れ)，咬痕，焼けなどのダメージ，目視・4mm 試料については重量を記録した。計測は行っていない。

同定破片数を 'NISP'，最小個体数を 'MNI' と表記する。鳥獣類の出土部位数については，同定された破片から求められる最小の部位数 'MNE' を示した。その際，頭蓋骨，下顎骨については齢査定の結果を，四肢骨などについては骨端部の癒合状況も考慮した。

目視試料は 2 ～ 4 層の試料があるが，3 層がほとんどを占め，時期も縄文時代晩期後半の限られた時期であるため，集計は層で分けずまとめて行った。

2. 同定・観察結果

(1) 貝類

土壌サンプル No.9 のみを対象とした。貝類は 25 分類群を同定し（第 4 表），潮間帯～浅海の砂泥底～岩礁に生息する種から構成される。なお，殻頂部を持たない破片でも種同定が可能なものは同定し，計測重量に含めた。

第 3 表　出土動物遺存体種名表

軟体動物門 Mollusca
　多板綱 Polyplacophora
　　新ヒザラガイ目 Neoloricata
　腹足綱 Gastropoda
　　カサガイ目 Nacelldae sp.
　　クボガイ *Chlorostoma argyrostoma lischkei*
　　イシダダミ *Monodonta labio*
　　スガイ *Turbo cornatuscoreensis*
　　ウミニナ *Batillaria multiformis*
　　タマキビガイ *Littorina brevicula*
　　オオヘビガイ *Serpulorbis imbricatus*
　　エゾチヂミボラ *Pteropurpura freycineti*
　　レイシガイ *Thais bronni*
　　イボニシ *Thais clavigera*
　　アカニシ？ *Rapana venosa*
　　ムシロガイ科 Nassariidae sp.
　　陸産貝類（2 種）
　二枚貝綱 Bivalvia
　　ムラサキインコ *Septifer virgatus*
　　イガイ *Mytilus coruscus*
　　イタヤガイ科 Pectinidae sp.
　　マガキ *Crassostrea gigas*
　　バカガイ科（不明二枚貝 A）Mactridae sp.
　　オニアサリ *Protothaca jedoensis*
　　アサリ *Ruditapes philippinarum*
　　ウチムラサキ *Saxidomus purpurata*
　　マルスダレガイ科（不明二枚貝 B）Veneridae sp.
　　オオノガイ *Mya arenaria oonogai*
節足動物門 Arthropoda
　顎脚綱 Maxillopoda
　　フジツボ亜目 Balanomorpha sp.
脊椎動物門 Verterata
　軟骨魚綱 Chondrichthyes
　　板鰓亜綱 Elasmobranchii sp.
　　ネズミザメ上目 Galeomorphi sp.
　硬骨魚綱 Osterchthyes
　　ウナギ *Anguilla japonica*
　　マアナゴ *Conger myriaster*
　　ニシン亜目 Clupeoidei sp.
　　マイワシ *Sardinops melanostictus*
　　カタクチイワシ *Engraulis japonicus*
　　アユ *Plecoglossus altivelis*
　　サケ科 Salmonidae sp.
　　コイ科 Cyprinidae sp.
　　ボラ *Mugil cephalus*
　　マグロ属 *Thunnus sp.*
　　カツオ *Katsuwonus pelamis*
　硬骨魚綱 Osterchthyes
　　サバ属 *Scomber sp.*
　　マアジ *Trachurus japonicus*
　　スズキ *Lateolabrax japonicus*
　　マダイ *Pagrus major*
　　ゲンゲ亜目 Zoarcoidei sp.
　　ウミタナゴ *Ditrema temminckii temminckii*
　　キュウセン *Parajulis poecilopterus*
　　カワハギ科 Monacanthidae sp.
　　フグ科 Tetraodontidae
　　カサゴ目 Scorpaeniformes spp.
　　フサカサゴ科 Scorpaenidae sp.
　　アイナメ属 *Hexagrammos sp.*
　　ヒラメ *Paralichthys olivaceus*
　　カレイ科 Pleuronectidae sp.
両生綱 Amphibia
　　無尾目 Anura
爬虫綱 Reptilia
　　ヘビ亜目 Serpentes
鳥綱 Aves
　　アビ属 Gavia sp.
　　カイツブリ科 Podicipedidae sp.
　　アホウドリ科 Diomedeidae sp.
　　コアホウドリ *Diomedea immutabilis*
　　ウ科 Phalacrocoracidae sp.
　　ヒメウ *Phalacrocorax pelagicus*
　　ヒシクイ *Anser fabalis*
　　マガン *Anser albifrons*
　　カモ亜科 Amatinae sp.
　　キジ科 Phasianidae sp.
　　カラス科 Corvidae sp.
　　シギ科 Scolopacidae sp.
　　ツグミ属 *Turdus sp.*
哺乳綱 Mammalia
　　モグラ科 Talpidae sp.
　　オオカミ *Canis lupus*
　　タヌキ *Nyctereutes procyonoides*
　　カワウソ *Lutra lutra*
　　テン *Martes melampus*
　　イタチ *Mustela itatsi*
　　イノシシ *Sus scrofa*
　　ニホンジカ *Cervus nippon*
　　ムササビ *Petaurista leucogenys*
　　ノウサギ *Lepus brachyurus*
　　ネズミ科 Muridae sp.
　　ネズミ亜科 Murinae sp.
　　ハタネズミ亜科 Arvicolinae sp.
　　クジラ目 Cetacea sp.

アサリ

MNI で 58%，重量で 46% と圧倒的多数を占め，本貝塚の主体貝である。不明二枚貝としたものの中にも残りが悪く同定できなかったものが多く含まれているとみられる。被熱しているものが 1 点認められた。内湾の砂底や干潟に生息する。

マガキ

MNI では少数だが，重量では 19% を占めアサリに次ぐ。内湾岩礁や干潟に生息する。

第 4 表　貝類・節足動物出土状況（サンプル No.9）

種	殻頂数 L.	/	R	破片	微片	NISP メッシュ内訳 4mm	2mm	1mm	NISP	MNI	重量（g） 4mm	2mm	1mm	計
カサガイ目		1				1			1	1	0.04			0.04
クボガイ		60				27	33		60	60	19.12	1.15		20.27
インタタミ		17				9	8		17	17	3.21	0.17		3.38
スガイ		6				6			6	6	10.17			10.17
スガイの蓋		9				8	1		9	9	1.48	0.07		1.55
ウミニナ		1				1			1	1	0.34			0.34
タマキビガイ		18				18			18	18	16.72			16.72
オオヘビガイ				2		2			2	1	2.42			2.42
エゾナジミボラ		1				1			1	1	0.89			0.89
レイシガイ		16				16			16	16	101.03			101.03
イボニシ		6				6			6	6	9.25			9.25
アカニシ？				1		1			1	1	0.3			0.3
ムシロガイ科の一種		1						1	1	1			0.01	0.01
陸産貝類（2 種）		6						6	6	6			0.02	0.02
その他の巻貝		11				1	10		11	11	0.05	0.22		0.27
不明巻貝	殻軸					+			+	+	23.33			23.33
ムラサキインコ	8		9				17		17	9		0.26		0.26
イガイ	4		7			11			11	7	16.5			16.5
イタヤガイ科				1		1			1	1	4.84			4.84
マガキ	12		6			18			18	12	165.75			165.75
バカガイ科の一種（不明二枚貝 A）	82		73			152	3		155	82	59.02	0.21		59.23
オニアサリ	1					1			1	1	7.43			7.43
アサリ　通常	461		466			835	92		927	466	397.62	5.46		403.08
被熱			1			1			1	1	0.02			0.02
ウチムラサキ			1			1			1	1	7.19			7.19
マルスダレガイ科の一種（不明二枚貝 B）	3		3			6			6	3	9.83			9.83
オオノガイ	1		2			3			3	2	3.86			3.86
その他の二枚貝		4				4			4	2	1.18			1.18
不明二枚貝　マガキ幼貝？	2						2		2	2		0.08		0.08
アサリ幼貝？	2							2	2	2			0.01	0.01
アサリ？		104					104		104	52		3.15		3.15
不明		40				40			40	20	6.37			6.37
未分類貝破片						+	+		−	−	17	0.06		17.06
フジツボ亜目の 1 種（チシマフジツボ？）					10	5	5		10	−	0.98	0.27		1.25
計	576	301	568	4	10	1175	275	9	1459	818	885.94	11.1	0.04	897.08

バカガイ科の一種

詳しい同定ができなかった。ミルクイの幼貝の可能性がある。MNI では 10% と一定量を占め，アサリに次ぐ。

クボガイ・イシダタミ・タマキビガイ・レイシガイ

それぞれ MNI で 2 ～ 7%，重量で 2 ～ 10% と一定量を占める。潮間帯の岩礁に生息する。

その他の貝類

上記の他に，岩礁に生息する巻貝や，砂泥底に生息する二枚貝など他種類を同定したが，いずれも僅かである。また，陸産貝類 2 種を 1mm 試料から 6 点同定した。他に，対象サンプル外から新ヒザラガイ目を 2 点同定した。

(2) 魚類

目視試料 68 点と土壌サンプル No.9 の 4・2・1mm 試料 440 点を対象とし，27 分類群を同定した（第 5・6 表）。目視試料と土壌サンプル試料とでは魚種組成が大きく異なる。

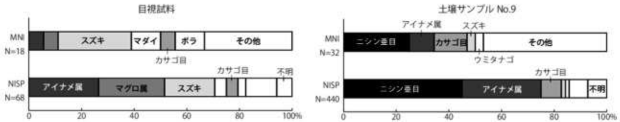
第5表　魚類出土状況（目視試料）

	前頭骨	上後頭骨	基後頭骨	前上顎骨	主上顎骨	歯骨	角骨	方骨		主鰓蓋骨		椎骨										NISP	MNI
	－	－	－	－	－	－	－	－		－		第一椎骨	第二椎骨	腹椎（前）	腹椎	腹椎（後）～尾椎（前）	尾椎（中）	尾椎（後端付近）	尾椎（残り悪い）	尾椎	－		
種	－	－	－	R	R	L	L	L	R	L	R	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－		
マアナゴ															1							1	1
ボラ											2											2	2
マグロ属															2	11	3		1			17	1
スズキ			1		1	1	1		1	3	5											13	5
マダイ	1	2																				3	2
ウミタナゴ															1							1	1
キュウセン																				1		1	1
カワハギ科															1							1	1
フサカサゴ科														1						2		3	1
アイナメ属												1	1	3	3			2		8		18	1
ヒラメ				1				1														2	1
カレイ科															1					1		2	1
不明																					4	4	－
総計	1	2	1	1	1	1	1	1	1	3	7	1	1	4	9	11	3	2	1	12	4	68	18

第6表　魚類出土状況（サンプル No.9）

	基後頭骨	鋤骨	前上顎骨	主上顎骨	歯骨	背鰭棘	角骨	方骨		主鰓蓋骨	椎骨										稜鱗	NISP	MNI
	－	－	－	－	－	－	－	－		－	第一椎骨	第二椎骨	第二椎骨？	腹椎（前）	腹椎	尾椎（後）	尾椎	尾部棒状骨	椎骨片	－	－		
種	－	－	R	R	L	－	R	L	R	L	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－		
板鰓亜綱																				3		3	1
ネズミザメ上目						1																1	
ウナギ																	4					4	1
マアナゴ															1		1					2	1
ニシン亜目															93	3	81	2				179	－
マイワシ					1						7	6										14	7
カタクチイワシ																	5					5	1
アユ																	3					3	1
サケ科																			2			2	1
コイ科															1							1	1
ボラ																	1					1	1
カツオ																	1					1	1
サバ属															2							2	1
マアジ																	1				1	2	1
スズキ				1	1			1							1		3					7	1
マダイ															1							1	1
ゲンゲ亜目															2		2					4	1
ウミタナゴ				1											4		1					6	1
カワハギ科															1							1	1
フグ科															1							1	1
カサゴ目													3				25					28	3
フサカサゴ科								1	1		1						2	1				6	1
アイナメ属	3	3	2	3			1	2	1	1		1		11	39	8	55	2				132	3
ヒラメ																	1	1				2	1
不明						4					1				3	2	18	2		2		32	－
総計	3	3	2	5	2	5	1	4	2	1	9	7	3	11	149	13	204	8	2	5	1	440	32

魚類組成



ニシン亜目

土壌サンプル試料から最も多く検出され，主要魚種である。種が同定できたのはマイワシとカタクチイワシで，マイワシは歯骨・第一椎骨・第二椎骨を計 14 点，カタクチイワシは尾椎を 5 点同定した。これら以外は種同定が困難な椎骨で 179 点ありニシン亜目とした。多くはマイワシと考えられる。

マグロ属

目視試料から椎骨を 17 点同定し，目視試料では主要魚種である。椎体幅が 25 ～ 54mm のものがあり，35 ～ 45mm の大型のものが多い。腹側に切創のあるものが 1 点認められた。

スズキ

基後頭骨・主上顎骨・歯骨・角骨・方骨・主鰓蓋骨・腹椎・尾椎を同定し，目視試料から 13 点，土壌サンプル試料から 7 点検出された。目視試料では主要魚種で MNI が 5 と最多である。

アイナメ属

基後頭骨・鋤骨・前上顎骨・主上顎骨・角骨・方骨・主鰓蓋骨・腹椎・尾椎・尾部棒状骨を同定し，目視試料から 18 点，土壌サンプル試料から 132 点検出された。目視・土壌サンプル両試料において主要魚種となっている。なおカサゴ目にはアイナメの可能性があるものも含まれる。

その他の魚類

カサゴ目やウミタナゴ，ゲンゲ亜目など浅海の岩礁に生息する種や，マアジやサバ属など沿岸域の表層でみられる種，ウナギやアユなどの淡水魚，サメ・エイ類（板鰓亜綱）を同定した。

(3) 鳥類

目視試料から 53 点，4mm 試料から 51 点，2mm 試料から 1 点，計 105 点抽出した。このうち種が判明したもの 67 点，種不明のもの 13 点で，12 分類群を同定した（第 7 表）。指骨・胸骨・複合仙骨・椎骨は同定対象外とし，これら未同定のものは 25 点である。

カモ科

カモ亜科：21 点を同定し，鳥類で最も多い。カモ亜科は種類が多く形態も似ているため種の区別が難しい。オシドリやミコアイサ程度の中小型のものからマガモ程度の大型のものまであり，大型のものが多い。前肢・後肢の各部位が出土し，上腕骨が多い。上腕骨 1 点に骨幹部の切断を意図した切り込みが認められた。

ガン亜科：大型のカモ科であるガン亜科はヒシクイ 2 点・マガン 1 点を同定した。

ウ科

ウミウ / カワウ：大型のウ科で区別は難しい。カモ亜科に次いで多い 19 点を同定した。前肢・後肢の各部位が出土し，足根中足骨が多い。足根中足骨 1 点の骨幹部に切断痕が，上腕骨 1 点に打割痕が，烏口骨 1 点と大腿骨 2 点に切創が認められた。

ヒメウ：ウミウ / カワウより小型でプロポーションもやや異なる。3 点同定した。

カワウは留鳥，他は北海道や本州北部で繁殖し，本州南部以南では冬鳥として飛来する。これらは海岸や海洋に生息し，海岸の断崖に集団で営巣する。現在の松島周辺では，ウミウは周年分布するが，

第 7 表　鳥類出土状況

種	部位	L/R	部分	同定 日規 4mm	NISP	MNI
アビ属	烏口骨	L	全体	1	1	1
カイツブリ	烏口骨	R	全体	1	6	2
	上腕骨	R	近位～中位	1		
	大腿骨	L	近位	1		
	脛足根骨	L	近位	1		
			中位～遠位	1		
			遠位	1		
アホウドリ科	下顎骨	R	中位～遠位	1	3	1
	肩甲骨	R	近位～中位	1		
	脛足根骨	L	近位	1		
ウミウ / カワウ	烏口骨	L	全体	1	19	3
			近位～中位	1		
		R	全体	1		
	肩甲骨	L	近位	1		
	上腕骨	L	中位～遠位	1		
		R	近位	1		
	橈骨	L	近位	1		
	尺骨	L	近位～中位	1		
			中位～遠位	1		
		R	近位～中位	1		
	大腿骨	L	全体	1		
		R	全体	2		
	足根中足骨	L	全体	1		
			近位	1		
			中位～遠位	1		
		R	全体	2		
			近位	1		
ヒメウ	肩甲骨	L	近位	1	3	1
	脛足根骨	L	近位～中位	1		
		R	遠位	1		
ヒシクイ	手根中手骨	R	近位	1	2	1
	脛足根骨	L	中位～遠位	1		
マガン	上腕骨	R	中位～遠位	1	1	1
カモ亜科	烏口骨	R	全体	1	21	4
	上腕骨	L	近位	2		
			近位～中位	1		
			中位～遠位	2		
			遠位	1		
		R	全体	2		
			近位～中位	1		
			遠位	1	1	
	橈骨	R	遠位	1		
	手根中手骨	L	全体	1		
		R	全体	1		
	大腿骨	R	全体	2		
			遠位	1		
	脛足根骨	L	中位～遠位	1		
		R	遠位	1		
	足根中足骨	R	近位	1		
キジ科	肩甲骨	R	近位	1	7	2
	上腕骨	L	近位	1		
	橈骨	R	遠位	1		
	手根中手骨	L	近位～中位	1		
		R	全体（一部欠）	1		
	大腿骨	L	近位	1		
			近位～中位	1		
カラス科	尺骨	R	近位	1	1	1
シギ科	烏口骨	L	全体	1	2	1
		R	近位	1		
ツグミ属	尺骨	L	全体	1	1	1
計				45　22	67	19

種	部位	L/R	部分	同定 日規 4mm	未同定 日規 4mm	未同定 日規 2mm	NISP	MNI
不明	頭蓋骨	M	全体	1			38	3
	頭部	–	–		3			
	烏口骨	R	遠位	1				
		–	近位破片		1			
	肩甲骨	L	近位～中位	1				
	上腕骨	–	近位破片		1			
	橈骨	L	近位	1				
	尺骨	L	全体	1				
		R	遠位	1				
	手根中手骨	L	全体	1				
	脛足根骨	L	近位	1				
		R	近位～中位	2				
			中位～遠位	1				
		–	遠位破片		1			
	長管骨	–	端部	1	1			
		–	–		1			
	指骨	–	–		5	1		
	脚骨	–	–		2			
	脚骨破片	–	–		1			
	複合仙骨	–	–		2			
	椎骨	–	–		5			
	不明	–	–		2			
計				6　7	2　22	1	38	3

ヒメウは 11 月に北海道以北からかなり飛来して 5 月には北上する。

キジ科

キジかヤマドリの可能性がある。大型が 2 点，小型が 5 点で雌雄差と考えられる。小型の大腿骨 1 点に切創が認められた。草原や森林，林縁部に生息する。

カイツブリ科

前後肢を 6 点同定した。小型～大型があり数種を含むとみられる。大型の烏口骨 1 点に切創が認められた。小型のカイツブリは夏鳥，他種の多くは日本では冬鳥で，湖沼や河口・沿岸に生息する。

アホウドリ科

下顎骨・肩甲骨・頸足根骨の 3 点を同定した。コアホウドリ程の大きさである。海洋に生息する。

その他の鳥類

アビ属を 1 点，カラス科を 1 点，シギ科を 2 点，ツグミ属を 1 点同定した。アビ属は海上，沿岸，時に湖沼に冬鳥として飛来する。シギ科は湿地や草原，河口，干潟に生息する。

(4) 哺乳類

目視試料から 796 点，4mm 試料から 167 点，2mm 試料から 7 点抽出した。大型獣のシカ・イノシシ，ノウサギ・タヌキなどの中型獣，ネズミなどの小型獣，および海棲哺乳類からなる。種が判明

したのもの 299 点，種不明のもの 5 点で，11 分類群を同定した（第 8・12・13 表）。遊離歯・寛骨・膝蓋骨・腓骨・手根 / 足根骨・中手 / 中足骨・指骨・椎骨・肋骨・胸骨板は同定対象外とし，これら未同定のものは 666 点である。

ニホンジカ

同定・未同定合わせて 239 点を本種に分類し，哺乳類で最も多い。MNI は下顎骨で算定され 12 である。下顎骨から齢査定を行った（第 9 表）。成長段階ごとの個体数は幼獣（1 歳未満）が 3，若獣（1 ～ 2 歳）が 5，成獣（2.5 歳以上）が 4 である。下顎骨・肩甲骨・大腿骨・踵骨・橈骨・環椎・軸椎の順に出現率が高い。

イノシシ

同定・未同定合わせて 207 点を本種に分類し，ニホンジカに次ぐ。MNI は下顎骨で算定され 11 である。下顎骨から齢査定を行った（第 10 表）。成長段階ごとの個体数は幼獣 6，若獣 1，成獣 4 である。下顎骨・肩甲骨・環椎・上腕骨・大腿骨の順に出現率が高い。

第 8 表　大型哺乳類出土状況

		イノシシ								ニホンジカ								不明若成獣		不明幼獣	
		NISP				MNE*		MAU**	%MAU	NISP				MNE		MAU	%MAU	NISP		NISP	
		同定		未同定						同定		未同定						未同定		同定	未同定
部位		日視	4mm	日視	4mm	L	R			日視	4mm	日視	4mm	L	R			日視	4mm	4mm	4mm
角												38									
頭蓋骨												2						14	3		
上顎骨				16	1													1	1		
切歯骨														2							
下顎骨		22	−	3	−	11		22	100.0	17		3	1	12		24	100.0	18			
下顎 M3		1	−							3											
遊離歯				20	13							19	9						3		
肩甲骨		12	2			10	4	14	63.6	16	−			9	7	16	66.7	1			
上腕骨	近位	2	−			2	−	2	9.1	3	−			2	1	3	12.5			−	
	遠位	12	−			7	4	11	50.0	8	−			3	4	7	29.2			1	
橈骨	近位	6	−			1	5	6	27.3	10	−			5	5	10	41.7		1		
	遠位	7	−			3	4	7	31.8	6	1			2	4	6	25.0				
尺骨	近位	12	−			4	3	7	31.8	8	−			3	4	7	29.2		1		
	遠位																	2	3		
寛骨																		26	3		
大腿骨	近位	1	−			−	1	1	4.5	14	−			8	5	13	54.2	2	1		
	遠位	14	−			3	6	9	40.9	11	1			9	3	12	50.0				
膝蓋骨																		4	−		
脛骨	近位	7	−			−	4	4	18.2	7	−			3	4	7	29.2		1		
	遠位	4	2			2	3	5	22.7	3	−			2	1	3	12.5				
腓骨																		2	−		
踵骨		3	−			2	1	3	13.6	11	−			8	3	11	45.8	4	−		
距骨		3	−			2	1	3	13.6	5	−			2	3	5	20.8				
手根 / 足根骨																		10	3		
中手 / 中足骨				31	4							26	4								
長管骨																		9	1		3
指骨																		84	19		
環椎		7	1			6		12	54.5	6	−			5		10	41.7				
軸椎		−	−			−		−	−	5	−			5		10	41.7				
仙椎																		8	2		
椎骨																		95	18		
肋骨																		74	14		
肋軟骨																		−	1		
胸骨板																		3	−		
その他																		−	1		
計		113	5	71	18					133	2	88	16					356	76	1	3

*MNE 算定では日視と 4mm を合わせた．**最小動物単位．左右の MNE の合計，個体に 1 点の部位は 2 倍する．

第9表　ニホンジカ下顎骨詳細

No.	部位	左右	歯（括弧は抜け）	成長	萌出咬耗状況（Legge and Rowley − Conwy1988） m1/P2	m2/P3	m3/P4	M1	M2	M3	咬耗指数 M1	M2	M3	出歯線 L/B M1	M2	M3	年齢小池・大泰司1984	Brown and Chapman	個体数
137	前位〜中位	R	m1.m2.m3.M1.（M2）	幼	J	J	J/J/J	H	S/O								0 − 0.5y	5M	1
724	前位〜中位	L	m1.m2.m3.（M1）	幼	W	FW	W/J/J	S/O									0.5y	5 〜 10M	2
770	前位〜中位	R	（m1）m2.m3.M1	幼	SO	FW	W/W/J	J/J	S/O		6			+/−			0.5y	5 〜 10M	
863	前位〜中位	R	m1.m2.m3.M1.（M2）	幼	W	FW	FW/FW/J	J/J	S/O		6			−/−			0.5y	5 〜 10M	
322	前位〜中位（m3 部打割）	L	m1.m2.（m3）	幼	W	FW	S/O										（0.5y）	5 〜 10M 相当	
576	中位〜後位（m2 部分打割・後位に切削）	R	m3.M1.M2（m3 下に P4 あり）	若			FW/W/W	W/J	J/J	V	5	6					1.5y	15M	1
167	前位〜中位（舌側の広い範囲に多数切削）	L	（m1）m2.m3.M1.M2	若	SO	FL	FW/FW/J	W/J	J/J	S/O	5	6		−/−	−/−		1.5y	15M	
557	前位（中位側打割）	R	（m1）（P2 形成）	若	SO												（1.5 − 2.5y）	15 〜 18M	4
588	前位	R	（m1.m2）抜けかかり	若	SO	S/O											（1.5 − 2.5y）	18M	
852	中位〜後位（前位側打割・後位に切削）	R	P2.P3.P4.M1.M2.M3	若	J	J	J	W/J	J/J	J/J/U	5	6	7	±/−	−/+	−/−	1.5 − 2.5y	18M	
191	前位〜中位	R	P2.（P3.P4.M1）	若	J	SO	SO	S/O									（1.5 − 2.5y）	18M ≦	
452	中位（P4 前位側打割）	L	P4.M1	若			J	W/J			4			±/−			（1.5 − 2.5y）	18 − 27M	
400	中位	L	P2.P3.P4.M1.M2.M3	成	W	W	FW	W/W	W/J	J/J/U	4	5	7	+/±	±/−	−/+	2.5y	18 − 27M	1
575	中位（後位側打割）	L	P2.P3.P4.M1.M2.M3	成	W	W	J	FW/W	W/Bk	J/Bk/J	3	4	6	+/+	±/−		3.5y	27M	1
933	遊離歯	R	M3	成						FW/W/Bk			5				3.5 − 4.5y		1
956	中位	L	M2.M3	成					HW/HW	HW/HW/HW		2	3		+/+	+/+	8.5y ≦	27M ≦	1
926	前位（中位側打割）	L	（P2）	成	Bk														−
417	前位	L	（P2）	成	Bk														

ニホンジカの歯の萌出・摩耗コード（※各咬頭ごとに記録する。）
（内山 2007 より転載）

・萌出段階
C= 永久歯（小臼歯）の歯胚洞が乳歯の直下に見える。
V= 歯胚洞内に歯が見える。
E= 萌出が始まる。
H= 萌出が半分ほど進行。
U= 萌出は完了したもの、まだ咬耗していない。
咬耗段階
J= 咬耗の初期。咬頭にある２つの歯冠はエナメル質の摩耗でもつながっていない。
W= 咬耗が進行し、咬頭にある２つの歯冠は一方（通常前方）が摩耗によりつながってる。
FW= 咬耗がかなり進行し、摩耗のため露出した象牙質により漏斗が囲まれている。
HW= 咬耗が非常に進行し、漏斗が小さくなっている。漏斗の舌側と頬側との幅はいずれかの側の象牙質の幅よりも小さくなっている。
FL= 咬耗のため、咬合面が平らになり、漏斗が消滅した状態。

・その他
SO= 歯槽が空の状態。
S/O= 歯槽が空で、途中で壊れている状態。
Bk= 破壊された歯が残っている状態。

第10表　イノシシ下顎骨詳細

No.	部位	左右	歯（括弧は抜け）	成長	萌出・咬耗状況（内山 2007） P1	m1/P2	m2/P3	m3/P4	M1	M2	M3	咬耗指数（Grant1982） m3/P4	M1	M2	M3	Higham 1967	年齢段階（小池・林 1984）	個体数
451	前位〜中位	R	（i1 〜 4.c.m1）.m2.（m3）	幼		SO	W	SO	V							2-4m	0（3 ヶ月）	1
34	中位	L	（m2）.m3.（M1）	幼			S/O	W/W/J	Bk/Bk							（4-7m）	Ⅰ（6 ヶ月）	5
104	前位〜中位	R	（m1）.m2.m3	幼		SO	FW	W/W/J	S/O			c				（4-7m）	Ⅰ（6 ヶ月）	
679	前位〜中位	R ♀	m1.m2.m3.M1	幼	S/O	W	W	W/FW/W	J/J	V		d	a			7-8m	Ⅰ（6 ヶ月）	
82	中位	R	m2.m3.M1	幼			HW	FW/W/W	J/U	V		d	a			7-8m	Ⅰ（6 ヶ月）	
225	中位	L	m3.M1	幼				HW/FW/FW	J/U							7-8m	Ⅰ（6 ヶ月）	
389	中位	R	（m3）.M1	幼				SO	W/W	V			b-c			8-9m	Ⅰ（6 ヶ月）	
727	前位〜中位	L	（P1）.m1.m2.m3.M1.（M2）	幼	SO	W	FW	FW/FW/W	W/W	S/O			c			8-9m	Ⅰ（6 ヶ月）	
401	前位〜中位（中位側打割）	R ♀	（P1）.m1.m2.m3.M1.（M2）	幼	SO	FW	HW	HW/HW/ W	W/W	S/O		d-e	c			8-9m	Ⅰ（6 ヶ月）	
786	前位〜中位	R ♂	C.m1.m2.m3.M1.M2.	幼		HW	HW	FL/FL/HW	FW/W	H/E	V	e-f	d-e	a		10-11m	Ⅰ（6 ヶ月）	
445	前位	L+R ♂	（i1 〜 c）	幼													Ⅰ（6 ヶ月）	
661	前位（打割・切削）	L+R ♂	（C）														Ⅱ（18 ヶ月）以上	−
118	前位（打割）	R ♂	（C 〜 P4）														Ⅱ（18 ヶ月）以上	
259	前位	L+R	I1 〜 2														Ⅱ（18 ヶ月）以上	
39	中位（打割）	R	M2.M3	若					S/O	W/W	H/E			c	a	19-21m	Ⅲ（30 ヶ月）	1
310	中位（打割・切削）	L	M2.M3	若					S/O	W/W	H/E/V			d	a	19-21m	Ⅲ（30 ヶ月）	
377	中位（打割・切削）	R	M2.M3	成					S/O	W/W	W/J/H			d	b		Ⅳ（42 ヶ月）	2
553	中位	R	（P4）.M1.（M2）	成				S/O	FL/HW	Bk/Bk	S/O		g				Ⅳ（42 ヶ月）以上	
428	遊離歯	R	M3	成							W/W/J				b-c		Ⅴ（45 ヶ月）以上	2
673	前位（打割）	L ♀	I1 〜 M1	成	J	W	FW	HW	FL/FL				l-m				Ⅴ（45 ヶ月）以上	
258	中位	L ♂	（C 〜 3）.P4.M1	成	S/O	Bk	Bk	HW	FL/FL			f	m				Ⅴ（45 ヶ月）以上	
748	前位（切削）	L+R	なし	成														−
955	前位（打割）	R	なし	成														

イノシシ下顎歯の萌出、摩耗（内山 2007 より転載）

・萌出段階
C= 永久歯（小臼歯）の歯胚洞が乳歯の直下の見える。
V= 歯胚洞内の歯が見える。
E= 萌出が始まる。
H= 萌出が半分ほど進行。
U= 萌出は完了したものの、まだ咬耗していない。
咬耗段階
J= 咬耗の初期で、エナメル質が摩耗している状態。
W= 咬耗が進行し、象牙質が露出し始めた状態。
FW= 咬耗がかなり進行しているが、歯冠上に露出した象牙質の舌側と頬側の最大幅はいまだ各咬頭の咬合面の最大幅の半分を超えていない。ただし各咬頭の歯冠上に露出した象牙質の領域は部分的にだが互いにつながり始めている。
HW= 咬耗が非常に進行し、咬頭がかなり削られて、歯冠上に露出した象牙質の舌側と頬側の最大幅は各咬頭の咬合面の最大幅の半分を超えている。この段階では、各咬頭の歯冠上に露出した象牙質の領域は互いにつながっている。
FL= 咬耗のため、咬合面が平らになり、咬頭が消滅した状態。

・その他
SO= 歯槽が空の状態。
S/O= 歯槽が空で、途中で壊れている状態。
Bk= 破壊された歯が残っている状態。

第 11 表　ニホンジカ・イノシシ各部位にみられる打割痕・切創・咬痕

		シカ							イノシシ						
		N	打割		切創		イヌ	ネズミ	N	打割		切創		イヌ	ネズミ
下顎骨		17	7	41%	3	18%			22	8	36%	3	14%		
環椎		6	1	17%	1	17%			8		0%	1	13%		
軸椎		5		0%		0%									
肩甲骨	遠位	16	1	6%	6	38%			14		0%	1	7%	2	
上腕骨	近位	1		0%		0%			2		0%	1	50%		
	骨幹	3	2	67%	1	33%			9	5	56%	4	44%		
	遠位	7	6	86%	3	43%			3	2	67%	3	100%		
橈骨	近位	10	10	100%	5	50%			6	6	100%	2	33%		
	骨幹	4	3	75%		0%			5	3	60%	1	20%		
	遠位	3	2	67%		0%			2	2	100%		0%		
尺骨	近位	8	1	13%	4	50%			12	2	17%	1	8%	1	
大腿骨	近位	7	3	43%	2	29%									
	骨幹	8	8	100%	6	75%			4	3	75%		0%		
	遠位	11	7	64%	7	64%		1	10	2	20%	3	30%	1	
脛骨	近位	7	6	86%	4	57%	1		3		0%	1	33%		
	骨幹	1	1	100%		0%			6	6	100%		0%		
	遠位	2	2	100%		0%			4	2	50%	2	50%		
踵骨		11		0%	6	55%	1		3		0%	1	33%		2
距骨		5		0%	5	100%			3		0%	3	100%		
計		132	60	45%	53	40%	2	1	116	41	35%	27	23%	4	2

大型獣種不明

未同定の部位のほとんどはニホンジカ・イノシシとみられる。部位数の多い指骨・椎骨・肋骨が多いが，その中で寛骨が一定量あり，比較的出現率が高い部位といえる。また，全体が多孔質な胎児～幼獣の上腕骨と四肢骨が 3 点検出されている。

ニホンジカ・イノシシにみられるダメージ（第 11 表）

打割痕：上腕骨・橈骨・大腿骨・脛骨で高率で，下顎骨でも一定程度みられ，シカ・イノシシで似たような傾向を示す。これらは広い髄腔を有する部位であり，骨髄を取り出すために割られたと考えられる。中手 / 中足骨は同定・観察対象外であるが，ニホンジカにおいては打割率が一見して非常に高い。

切創：顕著なのは距骨でシカ・イノシシともに 100% である。他の部位では，シカが大腿骨や脛骨，イノシシが上腕骨で高くなっており両者で傾向がやや異なる。解体時に腱を外す際などについたものと考えられる。全体としてはシカの方が打割痕・切創ともに出現率がやや高い。イノシシが幼齢の個体が多いことと関係している可能性も考えられる。

その他の痕跡：被熱の痕跡は認められず，廃棄後についた動物による咬痕もまれである。

オオカミ

大型のイヌ科でオオカミとみられる。上顎骨を 1 点同定した。

タヌキ

下顎骨・上腕骨・橈骨・大腿骨を計 5 点同定した。MNI は 1 である。下顎骨は 2 点でともに打割痕・切創が認められる。

カワウソ

下顎骨 1 点を同定した。前位側に打割痕が認められる。

イタチ

寛骨・踵骨の 2 点を同定した。

テン

下顎骨・寛骨・脛骨の 3 点を同定した。下顎骨には切創が認められる。

第 12 表　中型哺乳類および海棲哺乳類出土状況

種	部位	L/R	部分	同定 日歯	同定 4mm	未同定 日歯	未同定 4mm	NISP	MNI
オオカミ	上顎骨	R	P2・P3・P4	1				1	1
タヌキ	下顎骨	L	(C・P1 ～ 4)_M1, (M2 ～ 3)	1				5	1
		R	(C・P1 ～ 4)_M1, (M2)	1					
	上腕骨	L	近位～中位	1					
	橈骨	L	近位骨幹～中位	1					
	大腿骨	R	中位～遠位	1					
カワウソ	下顎骨	L	(C)_P1 ～ 3,M1,M2	1				1	1
イタチ	寛骨	L	寛骨臼		1			2	1
	踵骨	R	全体		1				
テン	下顎骨	L	(I1 ～ 3)_CP1 ～ 4,M1, (M2)	1				3	1
	寛骨	L	腸骨～寛骨臼		1				
	脛骨	L	全体	1					
食肉目	遊離歯	–	–					3	–
ノウサギ	上腕骨	L	全体	1				9	2
	橈骨	L	近位	1					
	寛骨	L	ほぼ全体	1					
			寛骨臼～座骨		1				
		R	寛骨臼～腸骨		1				
	大腿骨	L	近位～中位	1					
			遠位	1					
		R	近位～中位	1					
	脛骨	L	近位～中位	1					
ムササビ	下顎骨	L	(I1・P1)		1			7	2
	遊離歯	–	–				1		
	上腕骨	R	中位～遠位	1					
			近位骨幹～中位	1					
	大腿骨	L	近位～中位（骨頭・大転子欠）	1					
		R	近位～中位	1					
	脛骨	L	近位～中位	1					
齧歯目	遊離歯	–	–				2	2	–
不明	環椎体	–	–				1	30	–
	下顎骨	L	下顎	1					
	寛骨	?	寛骨臼破片		1				
	踵骨	?	近位骨幹		1				
	手／足根骨	–	–			1			
	中手／中足骨	–	近位				1		
			近位～中位			1			
	長管骨	–	端部				1		
	指骨	–	–				4		
	仙椎	–	–				2		
	尾椎	–	–				1		
	椎骨	–	骨端				1		
			椎体				1		
			棘				1		
			–				7		
	肋骨	–	–			1			
	肋軟骨	–	–				1		
	不明	–	–				3		
計				22	8	3	30	63	9

種	部位	L/R	部分	同定 日歯	同定 4mm	未同定 日歯	未同定 4mm	NISP	MNI
クジラ目イルカ類	頸椎	–	椎体	3				3	1
				3				3	
不明	不明	?	–	1				1	–
	破片	–	–			1		1	
計				7		1		8	

第 13 表　小型哺乳類・爬虫類・両生類出土状況

種	部位	L/R	部分	同定 日歯	同定 4mm	未同定 日歯	未同定 4mm	NISP	MNI
ネズミ科	上顎骨	L	–		1			5	2
	下顎骨	R	–	1	1				
	遊離歯	–	門歯				2		
ハタネズミ亜科	上顎骨	–	–				1	2	1
	下顎骨	L	–		1				
ネズミ科	遊離歯	–	臼				1	5	–
	上腕骨	R	近位骨端				1		
	大腿骨	L	近位～中位	1			1		
	橈骨	–	–				1		
齧歯目	遊離歯	–	–					1	–
モグラ科	上腕骨	L	全体		1			1	1
不明小型哺乳類	長管骨	–	–				1	3	–
	指骨	–	–				1		
	その他	–	–				1		
ヘビ亜目	椎骨	–	–	13	1			14	1
無尾目	上腕骨	R	中位～遠位	1	1			6	2
	橈尺骨	L	近位～中位		1				
			全体（一部欠）				1		
	橈骨	–	–			1	1		
計				3	20	10	4	37	7

ノウサギ

上腕骨・橈骨・寛骨・大腿骨・脛骨を計 9 点同定し，中型獣で最も多い。MNI は 2 である。大腿骨 1 点に打割痕が，脛骨 1 点に切創が認められた。

ムササビ

下顎骨・遊離歯・上腕骨・大腿骨・脛骨を計 7 点同定し，中型獣ではノウサギに次ぐ。MNI は 2 である。上腕骨 1 点と脛骨 1 点に打割痕が認められる。

その他の哺乳類

ネズミ科は，顎骨でネズミ亜科を 5 点，ハタネズミ亜科を 2 点同定した。他の部位はネズミ科として 5 点同定した。モグラ科は上腕骨 1 点を同定した。海生哺乳類はイルカ類の腰椎 6 点を同定した。ほかにアザラシやオットセイなどの肩甲骨の可能性があるものが 1 点出土している。

(5) その他

土壌サンプル No.9 からフジツボ亜目の一種を 10 点同定した。目視・土壌サンプル試料から，ヘビ亜目の椎骨 14 点，カエル亜目の上腕骨・橈尺骨・椎骨計 6 点を同定した（第 4・13 表）。

3. 動物遺存体群の構成

(1) 貝類

アサリが重量・個体数の 40 ～ 60% を占め主体となる。マガキは重量で 20%，バカガイ科の一種とクボガイは個体数で約 10% を占め，以上が主要種となっている。これにレイシガイ・イシダタミ・タマキビガイが一定量加わる（第 4 表）。主要種はアサリ・マガキで，ハマグリを含まないことから干潟群集として捉えられる（松島 2003）。クボガイ・レイシガイ・イシダタミ・タマキビガイは潮間帯の岩礁に生息する。以上から，貝類は湾奥部の干潟に生息する種を主体とし，これに内湾の岩礁に生息する種が加わる構成といえる。

(2) 魚類

ニシン科・アイナメ属・カサゴ目は，土壌サンプル中 NISP で 80% 以上，MNI で 45% 程を占める。目視試料中ではマグロ・アイナメ属・スズキが NISP で 70%，MNI で 40% を占める（第 5・6 表）。出土点数でみた場合，目視試料の数は少なく，土壌サンプルでの組成が全体を反映しているといえるが，マグロ属は大型であり資源量としては重要性をもつとみられる。

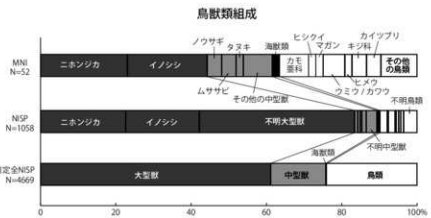
アイナメ属は沿岸の海藻の多い岩礁域に生息する。岩礁域に生息する種はほかにも数種類出土している。マグロ属・マイワシは回遊魚で，クロマグロは夏は北上し，三陸地方の沿岸の定置網でも漁獲されるという。マイワシも春から夏には北上し，秋になり水温が低下すると，南下する（酒井 1986）。以上から，魚類は岩礁域に生息する種と春～夏に回遊してくる種を中心に，沿岸域の表層や河口域などに生息する種少数から構成されているといえる。

(3) 鳥獣類

両生類・爬虫類・小型哺乳類を除いた鳥獣類の構成を検討する。これらは目視・4mm 試料に主要部位が含まれる。今回は 4mm 試料の全てから抽出を行っていないため，集計結果が実際の埋存状況とはなっていない。そこで分析率から全体での NISP を推定した（第 14 表）。これと比べると今回分析した NISP では中型獣・鳥類の比率が実際より小さくなっていることがわかる。

第 14 表　鳥獣類組成

種	NISP		MNI	
ニホンジカ	239	22.6%	12	23.1%
イノシシ	207	19.6%	11	21.2%
不明大型獣	436	41.2%	0	0.0%
ノウサギ	9	0.9%	2	3.8%
ムササビ	7	0.7%	2	3.8%
タヌキ	5	0.5%	1	1.9%
その他の中獣	12	1.1%	4	7.7%
不明中型獣	30	2.8%	0	0.0%
イルカ類	6	0.6%	1	1.9%
不明海獣類	2	0.2%	0	0.0%
カモ亜科	21	2.0%	4	7.7%
ヒシクイ	2	0.2%	1	1.9%
マガン	1	0.1%	1	1.9%
ウミウ	19	1.8%	3	5.8%
ヒメウ	3	0.3%	1	1.9%
キジ科	7	0.7%	2	3.8%
カイツブリ	6	0.6%	2	3.8%
その他の鳥類	8	0.8%	5	9.6%
不明鳥類	38	3.6%	0	0.0%
計	1058	100.0%	52	100.0%



次に，MNI 組成をみると，ニホンジカ・イノシシ 44%，カモ科・ウ科 19%，その他の鳥類 17%，ノウサギ・ムササビ 8%，その他の中型獣 10% であるが，実際は，鳥類・中型獣の割合はこれより高くなる。MNI は NISP が大きいものの値が NISP に比して小さく算出されることを考慮しても，鳥類は大型獣に匹敵し，中型獣も一定の割合を占めていたと推測される。大型獣や水辺に飛来する鳥類，ノウサギやムササビを主体に，森林や水辺に生息する多種類の鳥獣類から構成されているといえる。

第3章　まとめ

1. 土器

深鉢は頸部が内傾，口縁部が外反する器形で，小波状縁や平坦口縁で口縁端部に刻みが施されるものが多く，頸部に沈線や櫛歯状刻み目帯が施されるものがみられる。鉢・浅鉢・壺の胴上部には直線的蛇形文や横楕円文・入組工字文・π字文が施され，鉢・浅鉢肩部にメガネ状浮文をもつものも多い。

これらと同様の特徴を有する土器群は，県内では栗原市山王囲遺跡Ⅵ・Ⅶ層出土土器（伊東・須藤 1985）や大和町摺萩遺跡第 1 遺物包含層 1 ～ 15 層出土土器，東松島市里浜貝塚西畑地点出土土器などに類例が認められ，晩期中葉～後葉の大洞 C2 ～ A 式に位置づけられている。上記の遺跡では当該期における層位的変遷が捉えられており，それらの分析から，現在では大洞 C2 式は新旧の二段階に細分されるという考え方が定着している（東北歴史資料館 1983・宮城県教育委員会 1990・須藤 1996）。

ここでは，内容が詳細に検討されている摺萩遺跡第 1 遺物包含層 1 ～ 15 層出土土器と比較・対応関係をみることによって本遺跡出土土器の編年的位置づけを検討する。

摺萩遺跡第 1 遺物包含層 1 ～ 15 層

第 15 表　出土土器各類型の特徴と抽出点数

器種	分類	おもな文様・装飾	抽出点数							摺萩遺跡対応時期
			検出	表採土	1 層	2 層	3 層	4 層	計	
鉢	A2	羊歯状文						1	1	Ⅴ期
	A1	縄文・羽状縄文のみ					4	1	5	Ⅵ・Ⅶ期
	C1	小波状縁・口列刺突・頸部に沈線や櫛歯状刻み目帯	2		1		19		22	Ⅵ・Ⅶ期
	C2	口列刺突・山形突起・頸部に平行沈線	1				9		10	Ⅶ期
	B2	口列刺突・頸部に沈線					2	2	4	Ⅶ期
	D	波状口縁					7		7	Ⅶ期
	E1	口列刺突・頸部無文	5	1		2	8		16	Ⅶ期
	E2	山形突起・頸部に多重平行沈線	2				1		3	Ⅶ期
	B1	π字・Z 字状磨消縄文	2						2	ない
	不明	—	3				3		6	—
	B1a	簡素化した蛇形文					2		2	ない
	B1b	メガネ状浮文・直線的蛇形文	2				3		5	ない
	B2	口列刺突・頸部に平行沈線・貼り瘤	2				3		5	ない
	B2?	—					1		1	—
	C1	小波状口縁＋山形突起・π字文＋刺突文列	1			3	5		9	ない
	B1c	入組工字文	1	2		1	4		8	Ⅶ期
	B	—		1					1	—
	C2	小波状口縁＋山形突起・櫛歯状刻目帯	1				5		6	Ⅶ期
	C	—					1		1	—
	A	横 C 字状文・メガネ状楕円文					2		2	Ⅶ期
	b	小波状口縁・2 個一対の口縁突起・頸部に沈線		1			2		3	Ⅶ期
	不明	—	1				2		3	—
浅鉢	B	横位楕円文・直線的蛇形文					3		3	Ⅶ期
	C1	横位楕円文・直線的蛇形文・メガネ状浮文	2	2		1	4		9	Ⅶ期
	C2	横 C 字状＋π字文・メガネ状浮文		1		2	4		7	Ⅶ期
	C	—					2		2	—
	A1	π字文・入組工字文	1	1		1	3		6	Ⅶ期
	A2	平行沈線文	1			1			2	ない
	不明	—				1	1		2	—
壺	A1	口頸部内傾					3		3	Ⅶ・Ⅷ期
	A2	山形突起・2 個一対の突起					3		3	Ⅶ期
	A	—					1		1	—
	B	口頸部外傾・口沿に沈線				2	4		6	Ⅶ期
	AB1	直線的蛇形文・横楕円文・帯状文					5		5	Ⅶ期
	AB2	入組工字文・π字文・工字文	1	1			3		5	Ⅶ期
	AB	—				1			1	—
	C	口列刺み・小波状口縁					3		3	Ⅶ期
注口	A	蛇形文（曲線的・直線的）		1			6		7	Ⅵ・Ⅶ期
	B	π字文					1		1	Ⅶ期
蓋	—	工字文・π字文					2		2	—
計			28	11	1	15	131	4	190	

出土土器は，Ⅵ期：15 ～ 7 層（大洞 C2 式旧段階）と Ⅶ期：6f ～ 1 層（大洞 C2 式旧段階～大洞 A 式にかけての移行期）に分けられる。そして各時期の特徴として，Ⅵ期は平滑な直線的雲形文，口唇部の刻み目充填，頸部の刻み目充填帯，A 突起など，Ⅶ期は横楕円形区画文，横位連続工字文（入組工字文），π 字状工字文（π 字文），各種の突起（A 突起、B 突起、2 個 1 対の山形突起）や低い山形波状縁，浅鉢におけるメガネ状浮文などが挙げられている。

第 15 表に本遺跡出土土器各類型の特徴と抽出点数，そしてこれらに対応する摺萩遺跡の時期区分を示した。これをみると出土土器の多くはⅥ～Ⅶ期に対応しており，特にⅦ期が大勢を占める。抽出点数の多い深鉢 C1 類と同様のものは，摺萩遺跡ではⅥ・Ⅶ両期でみられ，Ⅵ期に出現しⅦ期に増大している。なお，鉢の主要類型である B1b・B2・C1 類は摺萩遺跡にはみられない。他に類例を求めれば，大洞 C2 式期に位置づけられる岩手県安堵屋敷遺跡出土土器（岩手県埋蔵文化財センター 1984）や，大洞 C2 ～ A 式期に位置づけられる岩手県九年橋遺跡（北上市教育委員会 1977）といった東北地方北部の遺跡に類例が認められる。なお，大洞 C1 式期や，大洞 A 式期以降に位置づけられるものについては，今回の調査ではごく僅かに出土したのみである。以上の検討から，今回出土した土器については，ほぼ大洞 C2 式新段階から大洞 A 式に移行する時期に位置づけられ，県内の同時期の遺跡出土土器と比べより北方的要素が強いものと捉えられよう。

2. 土製品

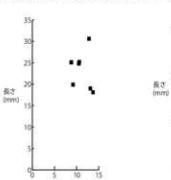
土偶・土版・管玉・ミニチュア土器・土製円盤が出土した。土偶は頭頂部に角状の突起が付く中空の土偶の頭部と腕部である。類例は蔵王町鍛冶沢遺跡（相原 1997）や岩手県安堵屋敷遺跡（前掲）などに認められ，大洞 C2 ～ A 式期に位置づけられている。土版は沈線による正中線の表現や，多重の弧状沈線が左右対称に施される。類例は大崎市北小松遺跡（宮城県教育委員会 2014），栗原市山王囲遺跡（前掲）や，大和町摺萩遺跡（前掲）などに認められ，大洞 C2 ないし C2 ～ A 式期に位置づけられている。今回の出土資料も概ね同時期に位置づけられると考えられ，共伴土器の編年的位置づけとも合致する。

3. 石器

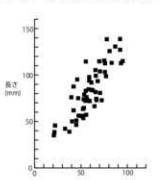
出土点数が多いのは石鏃・磨石である（第 16 表）。また製品に比して剥片が少ないことが指摘できる。

石鏃は，有茎の A 類が分類可能のものの 84% を占め主体となっている。完形の A 類について長幅分布をみると，長さ 18 ～ 31mm，幅 9 ～ 14mm のものがあり，長幅比は 2:1 近辺にある（第 30 図）。

磨石 A について，完形かそれに近いものの長幅分布をみると，長さ 3.5 ～ 14cm のものがあり，長幅比は 3:2 近辺にある（第 31



第 30 図　石鏃 A 長幅分布



第 31 図　磨石 A 長幅分布

図)。目立った集中はなく，この範囲内の様々な大きさのものが用いられているといえるが，長幅 5.5 〜 8.5 × 5 〜 7cm の範囲にやや集中がみられる。磨石 A・石皿には赤色顔料が付着するものが認められた (第 23 図 15・16)。また，礫石器には被熱の痕跡をもつものが少数認められた (第 21 図 6，22 図 8・12，23 図 21・24)。

石材についてみると，定型石器では珪質頁岩・頁岩が主に用いられ，剥片も同様の傾向がある (第 17 表)。礫石器では器種によって指向性が認められ，磨石 A では安山岩，凹石では砂岩が用いられる傾向にある (第 18 表)。不定形石器 B 類の全て，磨石 B 類の 60% で粘板岩が用いられている。粘板岩は当地域に広く分布する岩石で，それらの転石が便宜的石器として用いられたと考えられる。

第 16 表　石器・石製品集計表

		表採	検出	排土	1·2層	2 層	3 層	4 層	5 層	6 層	計	%類別
剥片石器	石鏃					13	33			1	47	52%
	石錐					2	6				8	9%
	尖頭器						1				1	1%
	石匙						1				1	1%
	石箆						1				1	1%
	楔型石器						2				2	2%
	不定形石器 A					2	4				6	7%
	不定形石器 B					1	6				7	8%
	石核					2	1				3	3%
	剥片		4	1		3	6				14	16%
	計		4	1		23	61			1	90	100%
礫石器	石皿	1	1			2	10	1			15	11%
	磨石 A	1	7		2	8	43	2			63	44%
	磨石 B					6	42		2		50	35%
	凹石	1				1	4	1			7	5%
	敲石		1				1				2	1%
	錘						1				1	1%
	砥石						2				2	1%
	破片	2									2	1%
	計	5	9		2	17	103	4	2		142	100%
石製品	石刀		1				1				2	12%
	石棒		2				1				3	18%
	石刀・石棒未成品		3	1		1					5	29%
	円盤状石製品					1	1				2	12%
	玉						5				5	29%
	計		6	1		2	8				17	100%
総計		5	19	2	2	42	172	4	2	1	249	

第 17 表　剥片石器の石材

器種	珪質頁岩	頁岩	玉髄	碧玉 (赤)	碧玉 (黄)	珪質凝灰岩	黒曜石	粘板岩	計
石鏃	30	10	3	1	1	1	1		47
石錐	5		1			1			7
尖頭器		1							1
石匙	1	1							2
石箆	1								1
楔型石器	2								2
不定形石器 A	1	2	2				1		6
不定形石器 B								7	7
剥片	7	4					3		14
石核	1			2					3
計	48	18	6	3	1	2	5	7	90

第 18 表　礫石器の石材

器種	流紋岩	安山岩	玄武岩質安山岩	花崗斑岩	閃緑岩	粘板岩	珪質凝灰岩	凝灰岩	安山岩質凝灰岩	礫岩	砂岩	デイサイト	ホルンフェルス	計
石皿		2				3		1	3	1		1	4	15
磨石 A	2	31	1	2		13		4	7	1	2			63
磨石 B	2	6		1	1	29		3	3	2	2	1		50
凹石						2					4		1	7
敲石						1	1							2
錘									1					1
砥石								1			1			2
破片						2								2
計	4	39	1	3	1	50	1	9	14	4	9	2	5	142

4. 石製品

石刀・石棒・玉・円盤状石製品が出土した。石刀・石棒は粘板岩製で，未製品も出土しており，本遺跡において作製されている。玉は勾玉状・小玉・小型扁平のものがある。石材は，珪質凝灰岩や粘板岩で，緑や赤みがかった石が用いられている。

5. 骨角器

釣針・鏃・銛頭・組み合わせ式ヤス・ヤス・刺突具・箆・棒状角製品・弭・簪・垂飾・装飾品・管玉・貝輪・不明製品・骨製品素材が出土した。

生産用具ではヤスが最も多い。着柄しての使用が想定される刺突具 A 類や箆も多く，釣針は少な

い。装飾具では，各種垂飾品・貝輪・装飾品が多い（第 19 表）。垂飾品では猪牙製のものが定型的で，短冊状で両端に穿孔がある。大型獣肋骨製のものはこれらと形態的に類似しており代替品の可能性がある。貝輪はベンケイガイ製のものが多く，他にイタボガキやカサガイ目製のものがある。ベンケイガイやイタボガキは貝輪以外では出土しておらず製品が搬入されたと考えられる。

本遺跡と同様の内湾に位置し同時期の里浜貝塚西畑地点では，漁労具ではヤス・銛が主体を占め釣針は少ない。漁労具以外では筌が多く，貝輪ではベンケイガイ製のものが多いなど（東北歴史資料館 1985），本遺跡と共通する点が多い。

第 19 表　骨角器集計表

	検出	1 期	2 期	3 期	4 期	計
釣針				1		1
鏃				1		1
銛頭				3		3
銛頭？				1		1
組み合わせ式ヤス	1		1	5		7
ヤス			1	12		13
刺突具 A（着柄式）				5		5
刺突具 B（単体使用）				2		2
腰				9	1	10
棒状角製品				3		3
笛				6		6
箸				1		1
猪牙製垂飾				4		4
垂飾			1	4		5
垂飾（貝輪）				2		2
装飾品			1	8		9
管玉				4		4
骨製品素材	2	1	1	10		14
貝輪	2		1	5		8
不明（鋲先？）				1		1
不明（棒状製品）				2		2
不明（穿孔具）				1		1
	5	1	6	90	1	103

6. 狩猟・漁労活動

遺跡は湾奥部の河口域に隣接する丘陵に立地しており，付近には森林・河川・湿地・干潟・岩礁などの環境が存在していたと推定される。遺跡の立地環境と出土動物遺存体群構成から，以下のような活動が推測される。

貝採取は干潟でのアサリ・マガキ漁を主体とし，岩礁でクボガイなどの巻貝も少量採取した。漁労における主な漁場は沿岸の表層や岩礁である。表層での漁は春から夏にかけて回遊してくるマイワシ漁が主体であり，マアジやサバ属も捕獲した。夏にはマグロ漁も行われた。漁場環境と生態から，漁法としては浅瀬での囲い込み漁や網漁などが考えられる。岩礁ではアイナメ属が主たる捕獲対象で，カサゴ目やウミタナゴなども捕獲した。捕獲には多く出土しているヤスが使用されたと考えられる。大型のスズキやマダイの漁獲にはヤスに加え銛も使用されたであろう。また，河口で淡水魚を捕獲することもあった。なお，今回は貝類・魚類を詳細に分析したのは 1 サンプルのみであるため，貝層全体の平均的様相を示していない可能性もあり，今後の検証が課題である。

狩猟は，丘陵部でのシカ・イノシシ猟，水辺・沿岸でのガンカモ類・ウ科の猟が重要で，ノウサギ・ムササビも一定量捕獲した。冬季にはガンカモ猟が集中的に行われたであろう。シカ・イノシシは肉に加えて骨髄も利用された。また，シカの角や骨は骨角器の素材としても重要であった。シカ・イノシシの出土部位には際立ったアンバランスさはなく，部位の搬入・搬出はあまりなかったと考えられ，捕獲された個体は遺跡内で消費されたと推測される。

引用・参考文献

相原淳一 1997「宮城県蔵王町鍛冶沢遺跡出土の土偶について」『仙台市博物館調査研究報告』17 pp. 85-92
伊東信雄・須藤 隆 1985『山王囲遺跡調査図録』一迫町教育委員会
岩手県埋蔵文化財センター 1984『安堵屋敷遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書 74
内山純蔵 2007『縄文の動物考古学ー西日本の低湿地遺跡から見えてきた生活像』
大泰司紀之 1980「遺跡出土ニホンジカの下顎骨による性別・年齢・死亡季節査定法」『考古学と自然科学』13

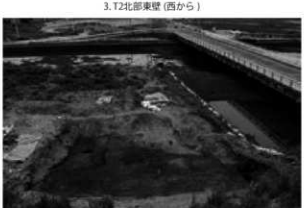
落合 明・田中 克 1986『新版魚類学』(下)　恒星社厚生閣
蒲原稔治・岡村 収 1985『原色日本海水魚類図鑑Ⅱ』保育社
北上市教育委員会 1977『九年橋遺跡第３次発掘調査報告書』北上市文化財調査報告第 18 集
小池裕子・大泰司紀之 1984「遺跡出土ニホンシカの齢構成からみた狩猟圧の時代変化」『古文化財の自然科学的研究』
小池裕子・林 良博 1984「遺跡出土ニホンイノシシの齢査定について」『古文化財の自然科学的研究』
酒井敬一 1986『南三陸の沿岸魚』
須藤 隆 1996「亀ヶ岡文化の発展と地域性」『日本文化研究所研究報告別巻』33 pp.93-132
東北歴史博物館 1983『里浜貝塚Ⅱ』東北歴史博物館資料集 7
東北歴史博物館 1985『里浜貝塚Ⅳ』東北歴史博物館資料集 13
林 良博他 1977「日本産イノシシの歯牙による年齢と性の判定」『日本獣医学雑誌』39-2
松井　章 2008『動物考古学』
松島義章 2003「第８節　貝類の考古学―縄文海進にともなう貝類相の変遷と環境変化」『環境考古学マニュアル』松井章編
宮城県教育委員会 1990『摺萩遺跡』宮城県文化財調査報告書第 132 集
宮城県教育委員会 2014『北小松遺跡－田尻西部地区ほ場整備事業に係る平成 21 年度発掘調査報告書 －』宮城県文化財調査報告書第 234 集
Brown and Chapman 1991 The Dentition of RedDeer(Cervus elaphus):A Scoring Scheme to Assess Age from Wear of the Permanent Molariform Teeth.Journal of Zoology(London).224:519-536.
Grant,Annie 1982 'The use of tooth wear as a guide to the age of domestic ungulates'.Ageing and sexing animal bones from archaeological sites. BAR British Series 109,pp.91-108
Higham,C.F.W. 1967 Stock Rearing as a Cultural Factor in Prehistoric Europe.Proceedings of the Prehistoric Society 33:84-106.
Legge,A.J. and Rowley-Conwy,P.A. 1988 Ster Carr Revisited: A Re-analiysis of the Large Mammals. Oxford: Alden Press

1. T1 地山掘削状況 (西から)

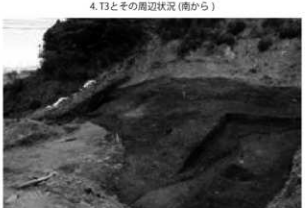
2. T2検出状況 (北から)

3. T2北部東壁 (西から)

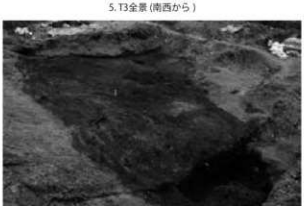
4. T3とその周辺状況 (南から)



5. T3全景 (南西から)



6. T3全景 (北西から)



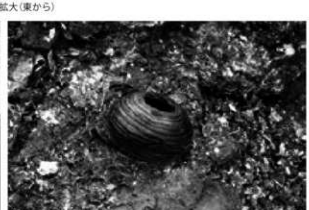
7. T3深掘区の位置 (南東から)

8. T3深掘区と堆積状況 (北東から)

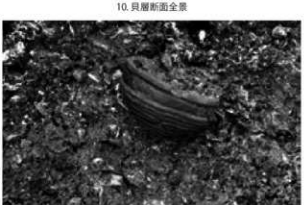
写真図版 1　T1・T2・T3

9. 貝層断面拡大（東から）

10. 貝層断面全景



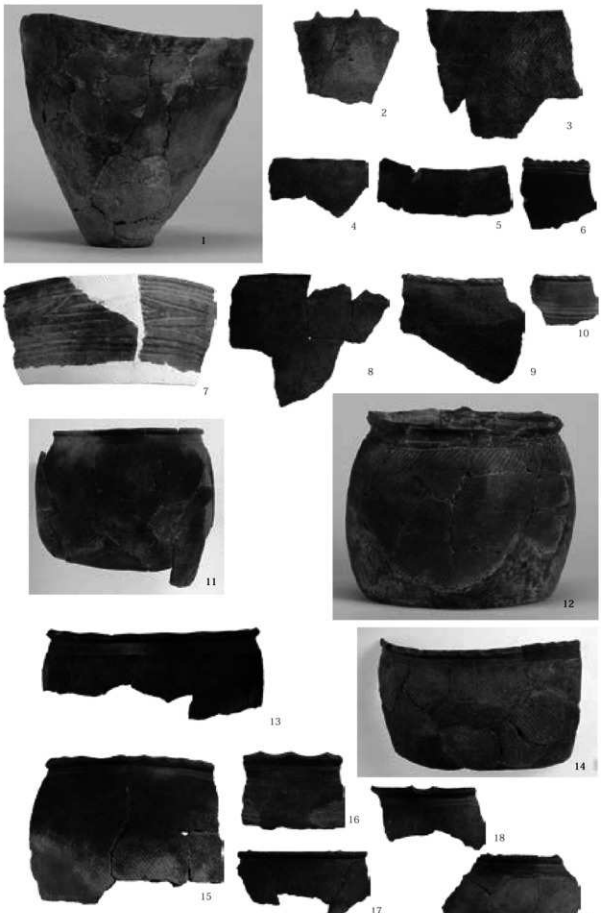
11. 3層直出土状況



12. 3層直出土状況

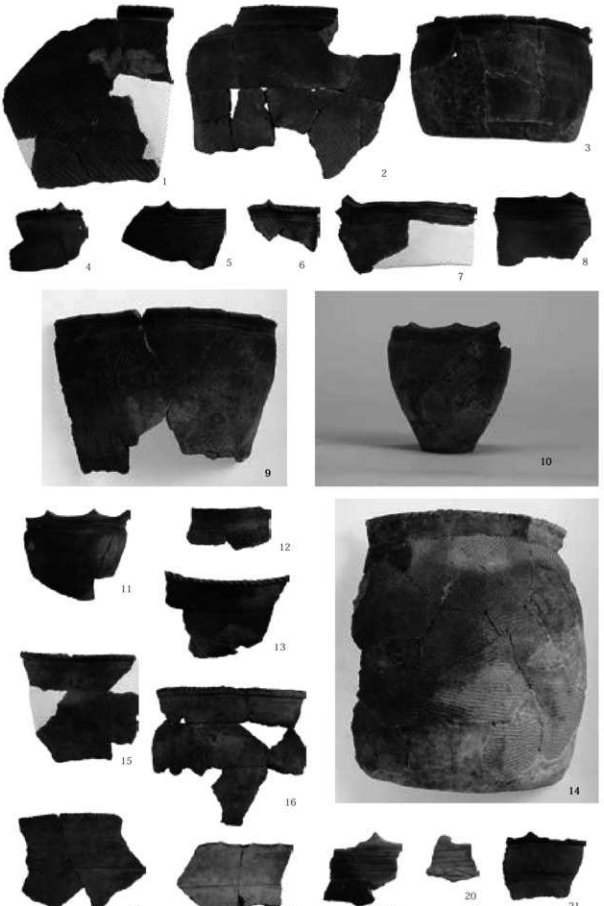
13. 深掘区調査風景

写真図版 2　T3



1～19：1/4

写真図版 3　深鉢



1～21：1/4

写真図版4　深鉢

1～20：1/4

写真図版5　鉢

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

15

16

14

17

18

19

20

21

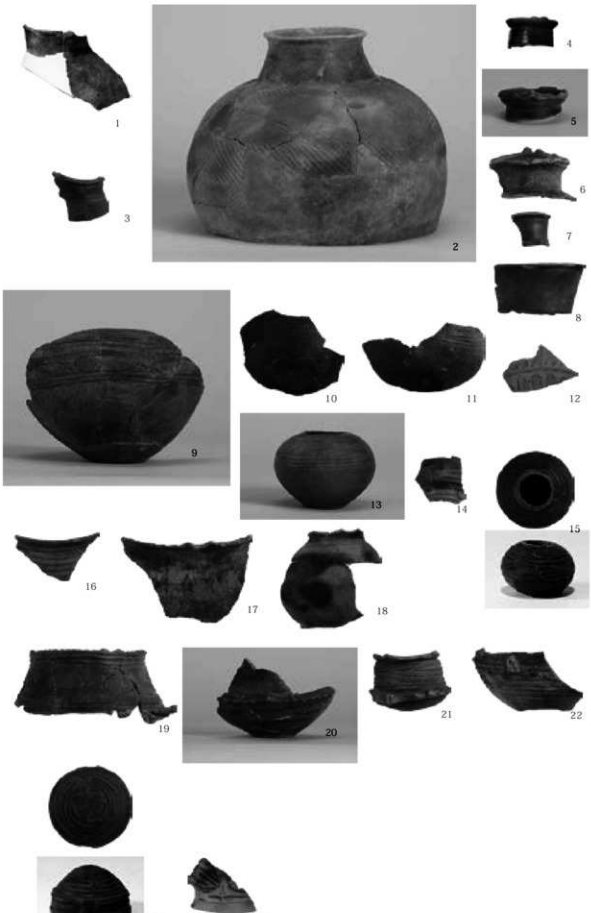
22

23

24

1～24：1/4

写真図版6　鉢・浅鉢

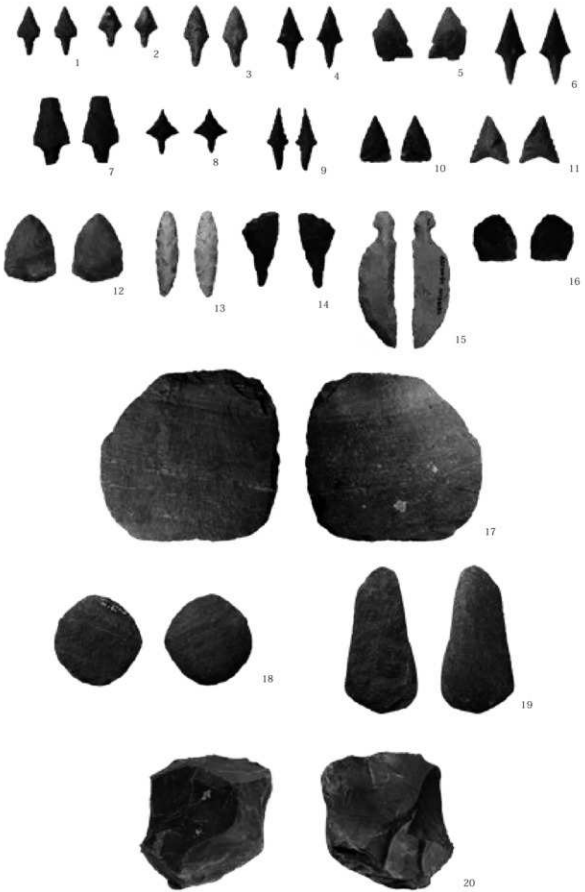


1～24：1/4

写真図版7　壺・注口・蓋

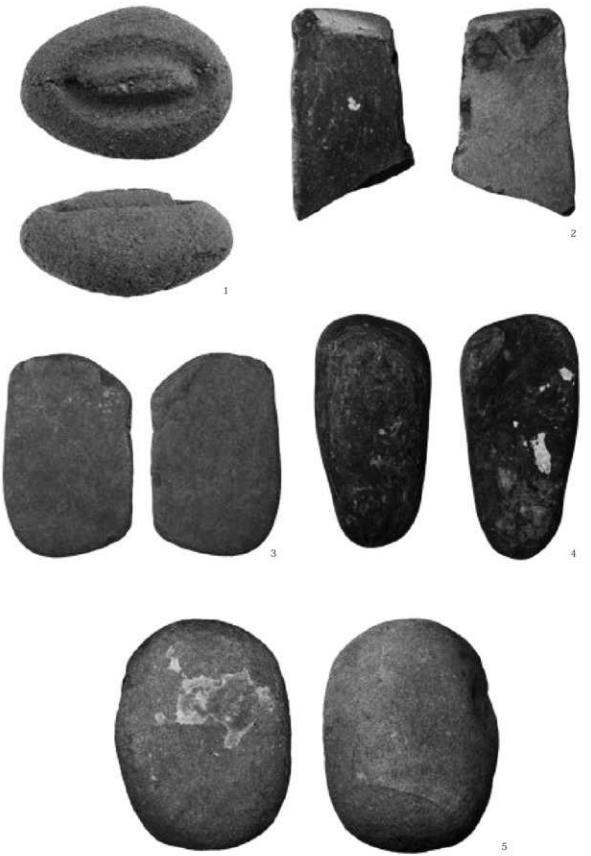
1～10：2/3　11～15：2/1　16～18：1/1

写真図版 8　土製品・石製品



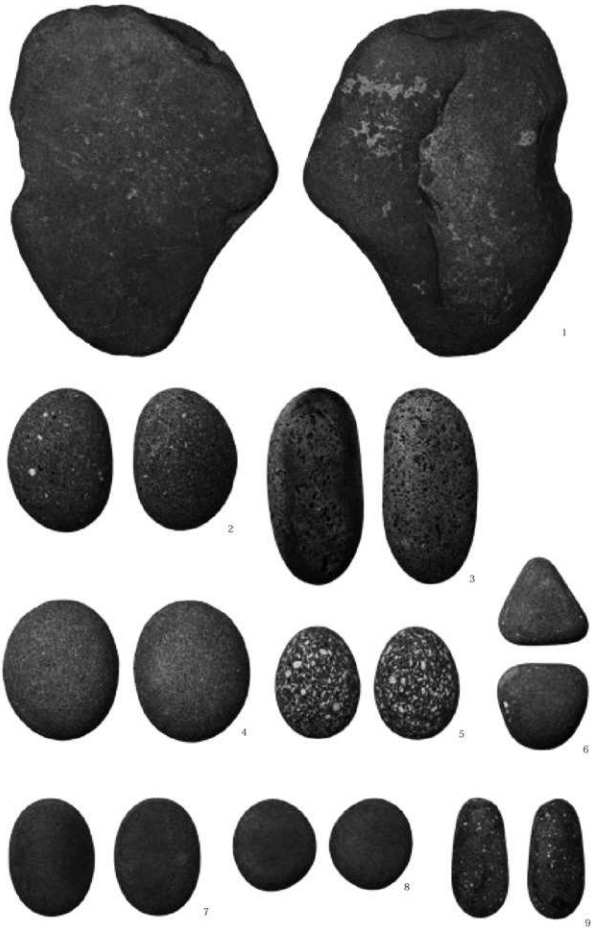
1～16：2/3　17～20：1/3

写真図版9　剥片石器



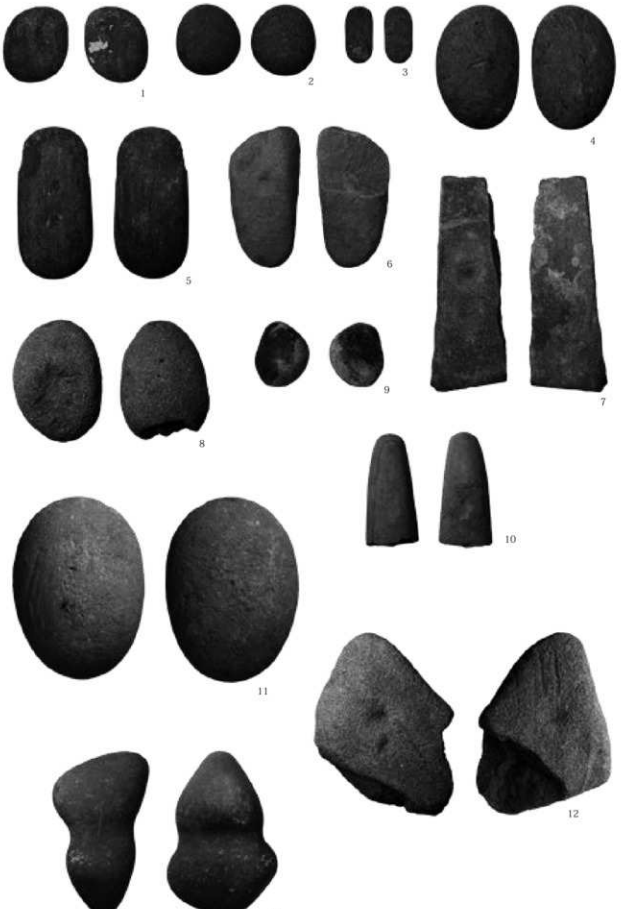
1～5：1/3

写真図版 10　石皿



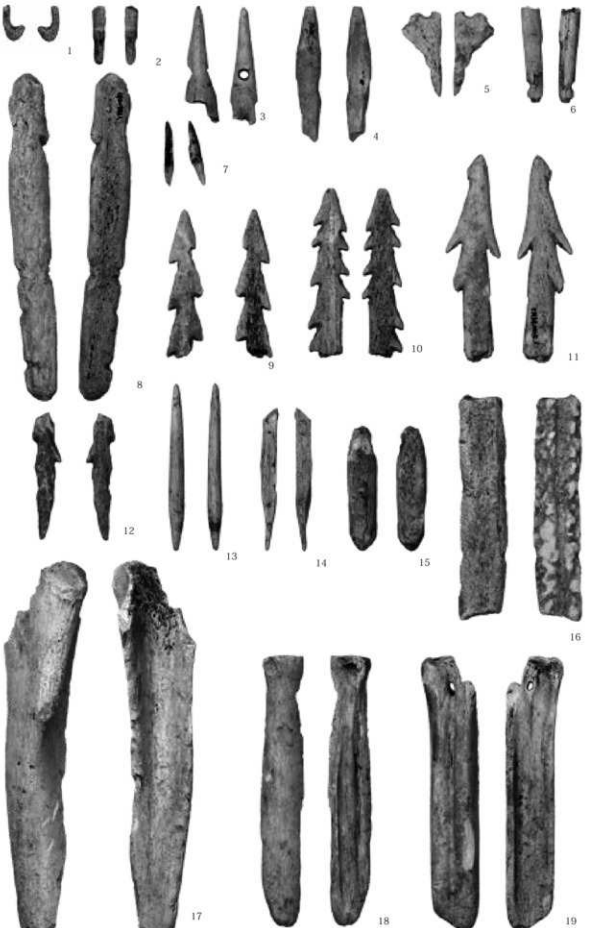
1～9：1/3

写真図版11　磨石



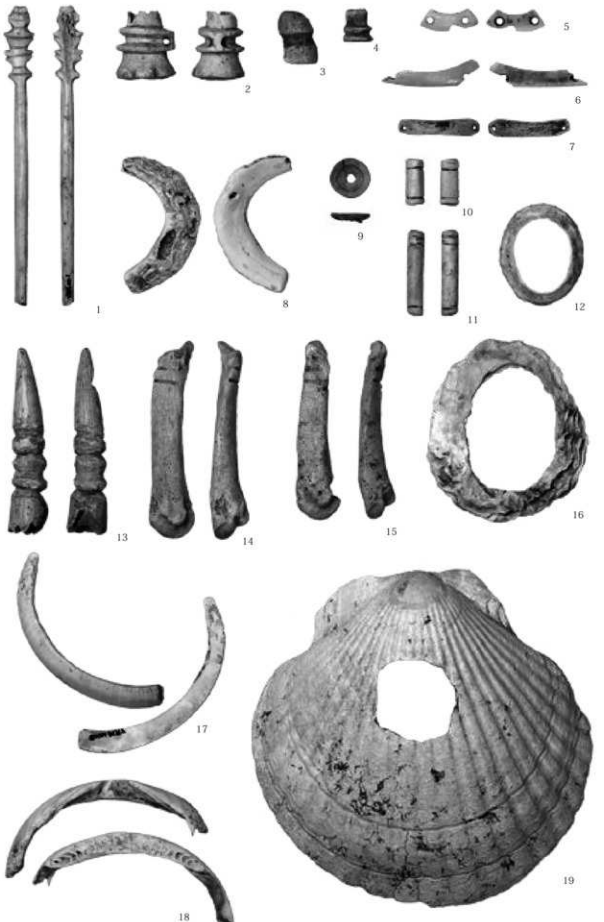
1～13：1/3

写真図版 12　磨石・凹石・敲石・砥石・錘



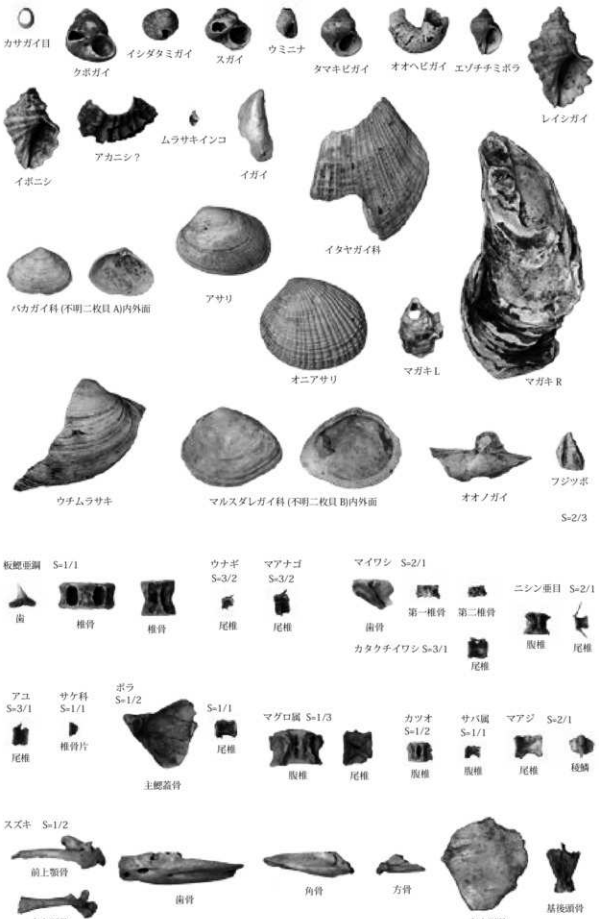
1～19：2/3

写真図版 13　漁労具・刺突具・棒状角製品・篦



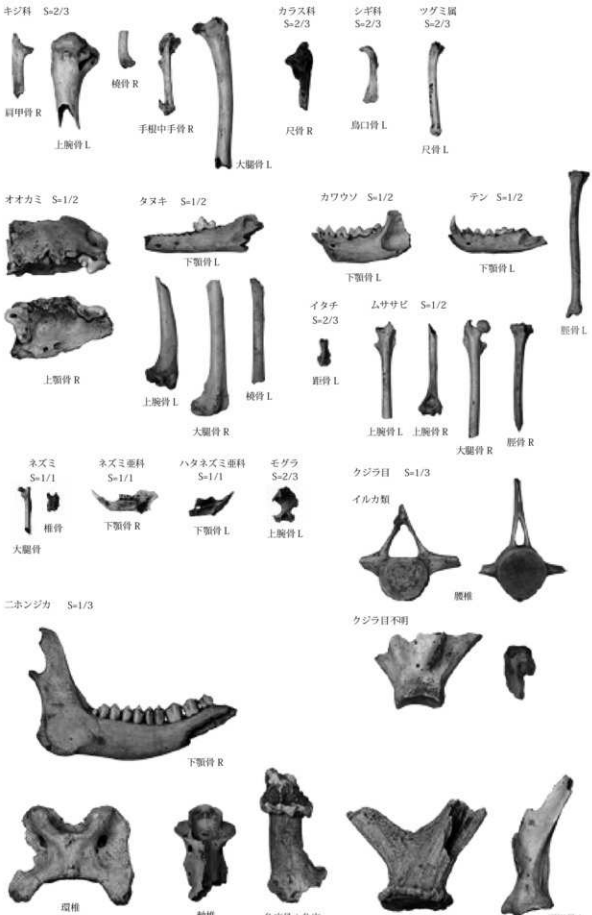
1～19：2/3

写真図版 14　篦・簪・弭・垂飾・装飾・貝輪

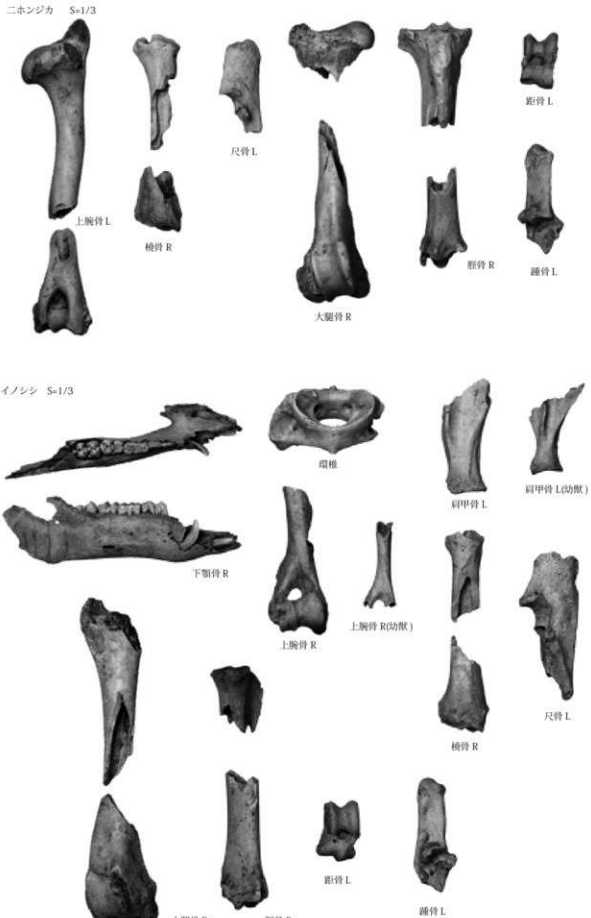


写真図版 15　貝類・節足動物・魚類

写真図版 16　魚類・両生類・爬虫類・鳥類



写真図版 17　鳥類・哺乳類


ニホンジカ　S=1/3
上腕骨 L
橈骨 R
尺骨 L
大腿骨 R
距骨 L
脛骨 R
踵骨 L
イノシシ　S=1/3
環椎
肩甲骨 L
肩甲骨 L(幼獣)
下顎骨 R
上腕骨 R
上腕骨 R(幼獣)
尺骨 L
橈骨 R
大腿骨 R
脛骨 R
距骨 L
踵骨 L

写真図版 18　哺乳類

貞山堀（ていざんぼり）

調査要項

遺跡名：**貞山堀**（県遺跡地名表番号 18052）
所在地：宮城県多賀城市大代
調査原因：砂押川外河川災害復旧計画
調査主体：宮城県教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課（現，文化財課）
調査員：豊村幸宏・濵中一道・矢口裕之（群馬県派遣）・岡本泰典（岡山県派遣）
調査期間：平成25年8月20日～28日
対象面積：約13,500㎡
調査面積：54㎡

1．調査に至る経緯

貞山堀は近世～近代初頭にかけて作られた運河で，現在の塩竈市から仙台市を通り荒浜まで，全長は約 40km に及び，現代まで何度か改修が行われている。多賀城市大代地内において，東日本大震災で被災した護岸の復旧計画があり，現在の護岸周辺に近世段階の築堤や石積等が遺存している可能性があるため，工事に先立って確認調査を実施した。

第１図　貞山堀調査地点と周辺の遺跡

2．調査区の位置

調査対象地は中洲部分と道路部分がある（第２図）。現状では中洲は緑地公園となっており，護岸はコンクリートで作られた部分と，割石が積まれた部分がある。道路は舗装されており，護岸はほぼ全面コンクリートで作られている。いずれの護岸も震災の影響で一部が破損している。確認調査トレンチは，中洲の西側で護岸に直交する方向に２本（1T・2T），中洲の北端で東西方向に１本（3T），道路部分で護岸に沿う方向に２本（4T・5T）設定して調査を行った。いずれの地点も標高は０～ 1m である。

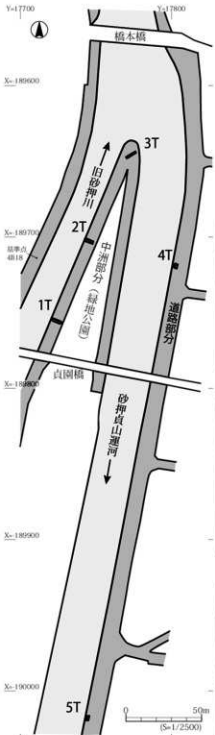
3．調査結果

中洲西側の 1T・2T では，盛土の層が深さ 2m 以上続くことを確認した。盛土は３段階に分かれ，新しい方から A・B・C 層とする（第３図）。A 層は均質な砂層で，東側の溝状の落ち込みを埋め戻しており，直下に黒色の自然堆積層がみられる。遺物は出土していない。B 層は礫混じりの粗砂層で，トレンチ西端の護岸に向けて落ち込む部分に 50cm 大の割石を含む。割石は積まれておらず不均等な並びのため，現在の護岸を作る際の裏込めとみられる。層中から石炭塊が出土している。C 層はややしまりのある砂層で，B 層以前の護岸裏込めの可能性がある。深さ 2m 付近から近代以降の磁器片と石炭塊が出土した。

中洲北端の 3T では，深さ 2m 付近まで現代の盛土が続き，それに切られる形で下部から河川堆積物とみられる安定した砂層を確認した（写真 4）。道路部分の 4T・5T では，道路建設に伴う盛土が深さ 1.8m 前後まで続き，直下から河川堆積物とみられる安定した砂層を確認した（写真５・６）。

4．まとめ

今回の調査の結果，中洲部分の割石が積まれた護岸は，堆積状況と出土品から近代以降に改修されたものと考えられる。道路部分においても，近世段階の貞山堀に関する遺構は確認されなかったことから，改修に伴って拡張された可能性が高いと判断した。



第2図　調査区配置図

第3図　2T北壁断面

写真1　調査地点遠景（北から）

写真2　1T（南西から）

写真3　2T（南西から）

写真4　3T（北東から）

写真5　4T（南東から）

写真6　5T（南から）

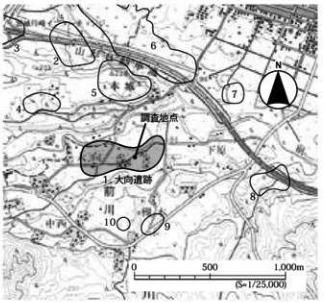
大向（おおむかい）遺跡

調 査 要 項

遺 跡 名：**大向遺跡**（宮城県遺跡地名表登載番号No.09004）遺跡略号：YF
所 在 地：柴田郡川崎町大字前川字大向地内
調査原因：大向地区防火水槽設置整備計画に伴う確認調査
調査主体：川崎町教育委員会
調査担当：川崎町生涯学習課・宮城県教育庁文化財保護課（現，文化財課）
調 査 員：村田晃一
調査期間：平成25年９月24・25日
対象面積・調査面積：41.6㎡

1. 調査に至る経緯

大向遺跡は柴田郡川崎町大字前川字大向地内に所在し，川崎町を西から東に向かって流れる前川南岸に形成された河岸段丘上に立地する（第１図）。縄文時代中期～晩期および弥生時代の散布地として登録されている。周囲の段丘上には縄文時代の遺跡が多く立地し，縄文時代中期に営まれていたものが多い。自動車道建設に伴いいくつかの遺跡で発掘調査がおこなわれており，中の内Ａ・Ｂ遺跡や元屋敷遺跡では，縄文時代中期の集落跡が発見されている。



1. 大向遺跡	段丘	散布地	縄文中～晩・弥生
2. 中の内Ａ遺跡	段丘	集落	縄文中
3. 中の内Ｂ遺跡	段丘	集落	縄文中
4. 羽根坂山遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文前～後
5. 前川本城跡	丘陵	城館	中世
6. 本屋敷遺跡	段丘	集落・屋敷	縄文中・後、中世
7. ガシャッポ遺跡	段丘	散布地	不明
8. 向鹿遺跡	段丘	集落	縄文後・平安
9. 樋木Ａ遺跡	段丘	散布地	縄文中・古代
10. 樋木Ｂ遺跡	段丘	散布地	縄文中

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

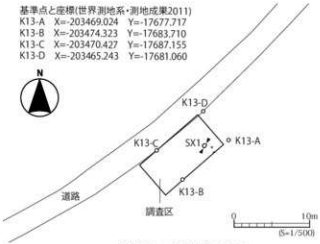
遺跡の中央付近で，防火水槽の設置が計画された。計画地周辺は耕作の際に多くの縄文土器が出土したとされる場所である。計画範囲にトレンチを設定し遺構確認調査を行ったところ，計画範囲の東側で土器埋設遺構が検出された。関係者間で協議を行い，遺構が認められなかった西側を拡張したところ遺構・遺物は検出されたなかったことから，防火水槽の位置を西にずらすことにより，遺構の現地保存を図ることとなった。検出した遺構は記録作成を行ったのち埋め戻した。

2. 調査結果

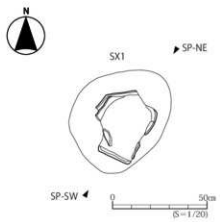
調査区の位置は道路脇の畑地である（第２図）。拡張部分を含め 8.0 × 5.2m の範囲を調査した。調査区東側で，土器埋設遺構１基とピット２基を検出した。

土器埋設遺構は長軸 60cm，短軸 49cm の楕円形の掘り方に大型の縄文土器深鉢を斜位に据えたもので，胴下部の半分が残存している（第３図）。直上の旧表土からは縄文土器片（写真４　１～５）が遺物用コンテナ１箱分と石皿２点（６・７）が出土した。

土器片には大型の破片が含まれ，少なくとも 10 個体認められる。１は胴部の片側半分および口縁部の一部が残存するものである。底径が埋設土器と一致しており，これと同一個体と考えられる。２は埋設土器の一部として取上げられたものである。埋設土器の一部では土器が二重になっていることから，組み合わされて埋設されたものの可能性がある。出土した土器はいずれも口縁が内湾するキャリパー形の器形で，２本なしいし３本一組の粘土紐や隆沈線で垂下文や渦巻文，クランク文が描かれるもので，縄文時代中期中葉の大木 8a 式の範疇で捉えられるものである。



第 2 図　調査区配置図



第 3 図　土器埋設遺構平面図

ピットはともに径 25cm ほどである。埋土が土器埋設遺構とは異なっており，新しい時期のものとみられる。

3. まとめ

縄文時代中期中葉の土器埋設遺構を検出した。周囲からはこれに伴う遺構は検出されず，遺跡内での位置づけや，性格については明らかにはできなかった。また，時期不明のピットを検出した。

引用文献

宮城県教育委員会 1987『中ノ内 A 遺跡・本屋敷遺跡 他一東北横断自動車道遺跡調査報告書Ⅱ―』宮城県文化財調査報告書第 121 集

写真 1　調査区周辺 (北東から)

写真 2　調査区 (北から)

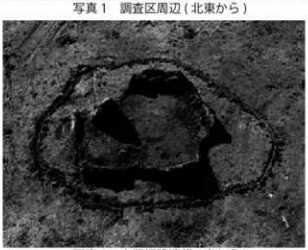


写真 3　土器埋設遺構 (東から)

写真 4　基本層序

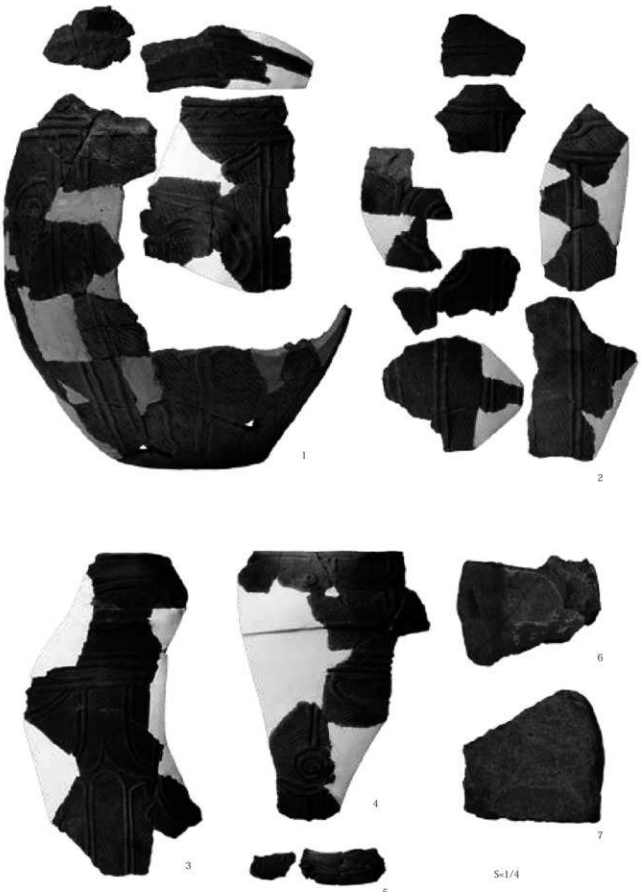


写真4　出土遺物

報告書抄録

ふりがな	おおくぼかいづかほか
書名	大久保貝塚ほか
副書名	
巻次	
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書
シリーズ番号	第250集
編著者名	西村　力・初鹿野博之
編集機関	宮城県教育委員会
所在地	〒980-8423　宮城県仙台市青葉区本町3-8-1　TEL: 022-211-3685　FAX: 022-211-3693
発行年月日	西暦2019年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	世界測地系 北緯	世界測地系 東経	調査期間	調査面積	調査原因
大久保貝塚 おおくぼかいづか	本吉郡南三陸町 もとよしぐんみなみさんりくちょう 志津川字大久保 しづがわおおくぼ	046060	60001	38度 40分 23秒	141度 26分 33秒	2014.06.16 ～06.25	397㎡	国道45号 迂回路建設
貞山堀 ていざんぼり	多賀城市大代 たがじょうしおおしろ	042099	18052	38度 17分 26秒	141度 2分 10秒	2013.08.20 ～08.28	54㎡	河川災害復旧計画
大向遺跡 おおむかい	柴田郡川崎町大字 しばたぐんかわさきまちおおあざ 前川字大向地内 まえかわおおむかいち	043249	09004	38度 10分 0秒	140度 37分 52秒	2013.09.24 ～09.25	42㎡	防火水槽設置整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大久保貝塚	貝塚	縄文	貝層・遺物包含層	縄文土器・土製品・石器・石製品・骨角器・動物遺存体	縄文時代晩期後半の貝層・遺物包含層
貞山堀	運河	近世～近代	護岸	磁器・石炭	近代以降に改修
大向遺跡	散布地	縄文	土器埋設遺構	縄文土器	縄文時代中期中葉の土器埋設遺構

要約

大久保貝塚では，良好な堆積状況を保つ縄文時代晩期後半の貝層・遺物包含層を検出した。多様な遺物や骨・貝が多く出土し，この時期の各種遺物の特徴や，生業活動の一端が明らかとなった。

貞山堀では，東日本大震災で被災した護岸の復旧作業に伴い確認調査を実施し，護岸は近代以降に改修されたものと判断された。

大向遺跡では，縄文時代中期中葉の土器埋設遺構が検出された。

宮城県文化財調査報告書第250集

大久保貝塚ほか

平成31年3月18日印刷
平成31年3月31日発行

発行　宮城県教育委員会
仙台市青葉区本町三丁目8番1号

印刷　株式会社　東北プリント
仙台市青葉区立町24番24号
TEL 022（263）1166㈹